

人生二回目でヒーロー
目指します

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある転生トリップで生まれた先は総人口の8割が特異体質を持ち、世の平和を守るヒーローが存在する世界だった。

主人公はその世界でヒーローを目指す事を決意するのだった。

僕のヒーローアカデミア大好きです！

なんか相澤さんが気づいたら出張ってましたw

処女作ですので未熟な文章ですがそんなこと気にしないで！と寛大な心で読んでくださると幸いです。

目次

0.	主人公設定	1
1.	結論、相澤さんマジイケメン	5
2.	親友、それはフラグ	16
3.	主人公は実は有名人	22
4.	出久くんはやはり主人公だった	29
5.	恵まれているという事	41
6.	普通に捕まえました	51
7.	遮られる事に定評のある主人公	61
8.	襲撃の悪意	71
9.	理屈じゃない	84
10.	ごめんなさいありがとう	99
11.	途中主人公空気すぎr（不思議な力）はっ！	110
12.	雄英体育祭開幕	121
13.	騎馬戦開幕	131
14.	騎馬戦中盤 飯田の想い	143

0. 主人公設定

石 弦（15） SEK I I T O

B i r t h d a y : 1 / 1 0

H e i g h t : 1 7 4 c m

好きなもの：イレイザーヘッド

お母さんの麺料理（絶品）

石, sヘア：黒髪のベリーショートでさらさら

石, sフェイス：綺麗系で真顔だとクールに見えて笑顔とのギャップが破壊力抜群

石, s全身：トレーニング故に鍛えられた美しいボディ

石, s腹筋：そろそろ割れそうで割れないで欲しい

石, s手：まめが堅くなってかっちかち

石, s頭：石頭でかっちかち

個性：粘着糸

・手首から先から透明な糸が出せる個性で最長50mまで伸ばせて糸の性質を粘着質に変えたり指先や手のひらで出す範囲の調節も出来る

・とても丈夫で脳無でさえ動きを止められる程に強力で応用性が高い個性

・かつちゃんみたいな真つ向からのパワータイプとは相性があまりよくない、自分の伸ばせる以上に糸を伸ばすと腕の腱が伸びてしまいうし最悪切れるので要注意！

外見イメージ、モデルはバカとテストと召喚獣の登場人物の吉井玲

前世からの人見知りで目立つのが嫌いだが戦闘などで集中すると周囲の状況が気にならなくなつて冷静になる、が集中が切れて視線に気づくと一気に恥ずかしくなつて内心で悶える

色々と沸点が超えると真顔になる周りにクールだと誤解されたりする

身長が女の子にしては高いがヒロアカ世界は個性からか大きい人とか多いから割と気にしてない

イレイザーヘッドこと相澤さんに強い憧れを抱いていて彼の様なヒーローになりたいと思つてる

今のところ好きな異性はいないがいつか彼氏が出来たらと恋に憧れはある

?

理想は大らかで優しいお父さんの様な人、相澤さん？彼はヒーローで兄的存在ですが
クラスだと梅雨ちゃんと三奈ちゃんと特に仲がよくて名前で呼び合う

弦からの1Aのみんなの印象

青山くん：自己主張パネエ、下睫毛

三奈ちゃん：元気を分けて貰ってる、可愛い

梅雨ちゃん：ケロイン、可愛い天使！

飯田くん：手の動きとか面白い、遮らないで欲しい

お茶子ちゃん：麗らかで可愛い

尾白くん：尻尾引っ張りたい

上鳴くん：チャララ

切島くん：いきなり話を振らないで欲しい

口田くん：声を聞いてみたい

砂藤くん：お父さんに体格が似てる

耳郎ちゃん：格好いい！クール！

障子くん：いい個性だ！腕格好いい！

瀬呂くん：突っ込み名人、これからも期待してる

常闇くん：影を触らせて欲しい

轟くん：驚きのチート

葉隠ちゃん：三奈ちゃんと同じく元気っ子

かつちゃん：いつかかつちゃんと呼んでみたい

出久くん：とても尊敬しているし努力を見習わなければと思ってる

峰田：下ネタはいいけど梅雨ちゃん達を対象にするのは許さない

八百万ちゃん：女子というか女史という感じ、クール

1. 結論、相澤さんマジイケメン

転生して4歳児なう。

転生の経緯とかは説明めんどいし省きます。

べ、別に興味ないだろうから省略してあげたとかじゃないんだからね！いやまじで。

生後4ヶ月の頃にテレビで見たヒーロー達の姿に異世界だと気づいて、さらにヒーローの中に「オールマイト」という前世で見たことのある名前を聞いてここが、僕のヒーローアカデミアという漫画の世界だと気づいたので。

中国の軽慶市で生まれた発光する赤ん坊に始まり、以降各地で次々に超常が始まり原因も分からず時は流れて超常は日常になった。

それから架空（ゆめ）は現実となり、世界総人口の8割が何らかの特異体質の超人社会となった世界、それが僕のヒーローアカデミアである。

幸い性別は前世と同じ女の子だしキャラに成り代わったとかでもないの私的にホツとした。顔立ちも結構可愛い感じでかなりうれしい。

ちなみに名前は、石 弦（せき いと）です。

この世界は主人公を除けばまさに名は体を表すな世界だ。発現した個性的にも私もまた名前〓個性みたいな感じになった。

個性は、“粘着糸”である。

手から透明なガムのような糸が出せる個性だ。試したら最長1.5mまで出たし、太さも指先からだど細いのが出て、手のひらからだど太いのが出せた。

これからの成長で出せる長さも伸びる筈だし応用性も高いし目立った欠点もなくかなり良い個性だと思う。

ひとまず無個性ではなくてホツとした。

私は主人公の出久くんではないし、かつちゃん風に言えばまさにモブなので無個性で最強とか強いとかが出来るとは到底思えないので本当に良かったと思う。

私的にはせっかくなのだから雄英高校のヒーロー科に進学して是非とも原作をこの

目で見たいというミーハー魂＋転生したのがせつかくこの世界なのだからヒーローになりたいという気持ちから4歳ながらに将来の進路を決めた。

私は第二の人生でヒーローを目指す事にした！

今のところは幼稚園でも原作キャラとは会えなかったから幼なじみフラグとかはまったくなかった。ちっ。

両親はヒーローではない一般人だ。

お父さんは石みたいで堅い頑丈な体と強い力持ちな異形型の個性で土木作業員として働いてる。

お母さんは糸を出せる個性で結婚前まで服飾系の仕事をしていたそう。

お母さんの個性の進化版みたいな個性を受け継いだ？私だがお父さんの影響か私はかなり頑丈な体だ。

前にジャングルジムの上から落ちて頭を打ったがこぶも出来ずに無傷だった。

両親にヒーローになると宣言したら子どもの言葉だからか笑ってがんばれと言ってくれた。

私は両親から受け継いだ個性でヒーローになるべくまずは子どもらしく外では遊び体力作りをして、中では個性の訓練をした。

より長く出せる様に物を取ったりしたり指先からならより細く手のひらからならより太く出せる様に練習した。

幼稚園は特に何事もなかった。

そして小学生になった。

知ってる名前がないから k t k r ! とはならずやはり原作キャラはいなかった。ちくせう。

成長に伴い体力も増えたし粘着糸も最長5mまで伸ばせる様になった。

これからはアメージングな蜘蛛男さんをイメージして彼のように自由自在に粘着糸で空中を華麗に移動したり糸を使った戦闘の特訓を始めた。

それに小学校に上がると同時に両親に頼んで格闘技の道場に通い始めた。

お母さんは少しいい顔をしなかったけれど弦がやりたいならと最終的にはOKしてくれた。

したらその道場でなんと！なんと！なんと！

出会いましたよ！出会っちゃいましたよ！

今はまだ若手らしいけど原作で主人公の担任のプロヒーロー、イレイザーヘッドこと相澤消太さんに！

私はイレイザーヘッドが大好きだから会って紹介されて驚いて思わずテンション上がって、ファン宣言して握手とサインをもらった。

相澤さんは私みたいな子どもがあまりメディアにもでないイレイザーヘッドのファンな事にか私の勢いにか

戸惑っていた。さすがに子ども相手だからなのか握手もしてくれたいしサインも書いてくれた。

原作時も合理主義から取材も受けずメディアへの露出も少ないイレイザーヘッドのサインというめっちゃくちや貴重な物を手に入れたゼ☆もちろん貴重だからって売ったりはしませんよ！キリッ

格闘技というか武道を前世でもやったことがないから結構苦戦してます。

道場の先生はすごく厳しい人で子ども相手でも限界までやらせる人だ。

でも雄英に入る為だしヒーローになるためだとがんばった。それでも挫折そうになった時は相澤さんの事を思い出しここで挫折して憧れのヒーローで大好きな相澤さ

んにがっかりされたくないという気持ちから自分を奮い立たせた。

同じ道場に大好きでそれでいてシビアな考えの相澤さんがいるからやる気スイッチが常にONになっているのだと思いますねキリッ

後から知ったけどこの道場は特に厳しい事で有名らしかった。

それから勉強もかっちゃんみたいな天才じゃないし前世でもサボっていた私はマジに高校レベルとか完全にアウトだ。

なんでお母さんよりもヒーローになることを応援してくれていて私に甘いお父さんに頼んで本屋で本当なら中学生レベルが欲しいけれどそれだとその知識どこからやねーん！てなるから2年生〜6年生までのドリルを買ってもらって勉強を始めた。

いやー、やってみると案外覚えてなくて驚いたね・・・。

算数や国語は楽勝だったんだけども特に嫌いな理科や社会はマジでやばいわ。

勉強しても頭に全然入ってくれなくて必死に道場の練習中も復唱していたら相澤さんに不思議がられた。

それで勉強の事を話したら驚かれて、ヒーローになるために英雄に入ろうと勉強してて、将来はイレイザーヘッドみたいに格好いいヒーローになりたいって言ったら少し照れた感じにそっぽ向きながら（めっちゃ可愛い）暇な時なら教えてやってもいいって言質頂きました↑ゲス顔

相澤さんやばいね。

若い頃から原作同様合理主義らしく髪も長くてもさいけどなんだかんだ優しいしいしイケメンだし原作ファンとしてもうたまりませんね！

サインは私的家宝で額に入れて部屋に飾ってます。

三年経過して四年生になりました。

粘着糸は最長10mまで伸ばせる様になったし道場の地獄の特訓にもかなりついで行ける様にもなった。

道場は年上の人達ばかりで格闘技だけの手合わせだとまだまだ負け続きだから自分的には強くなった実感がまったくない。それでも道場の人たちからはそこらの大人よりは強くなっていると言われたので強くなっているのだろうと思う。道場の人たちが強すぎるだけだからと思うことにした。

個性での戦闘も相澤さんがアドバイスをくれてかなり上手く扱える様になった。

許可をもらって道場の人と個性込みで手合わせしたらなんと私は初めてだが勝てたのだ。

その時は嬉しくて嬉しくて相澤さんの手をとりはしゃいだものだ。

そんなこんなあつてなかなか順調に事が進んでいてある日両親とシヨツピングモールに買い物に行つていた日。いきなり敵（ヴィラン）が暴れ出した。

敵と距離を取り様子を窺っていると敵の割と近くで5歳くらいの女の子がこけて泣き出した。

敵は女の子には構わず暴れていて女の子はかなり危険だ。

ヒーローはまだ誰も来ていない。

敵が女の子に気づいて不快そうに顔を歪めた。

やばい。

私は走り出していた。

走りながら右手で粘着糸を伸ばし10m以上離れていたが無理をして伸ばし女の子を自分の元に引き寄せる。

女の子を抱きかかえて左手で粘着糸を後ろの伸ばして柱にくっつけて一気に敵と距離をとる。

女の子をお父さんに渡し怒り狂い私の方に走ってくる敵に向かって私も走り出す。

不思議な程に私は冷静で自分の心臓の音がいやに大きく聞こえた。

冷静に敵を観察する。

明らかに怒り狂っていて動きは大ぶりで隙だらけだ。見た感じは盛り上がった腕から強化系の能力の様だ。

一応何があってもいいように心構えをしておく。

敵の体に粘着糸を走りながらつけて一気に突っ込む。

その勢いそのまま敵の胴体に膝蹴りを叩き込む。突然のダメージに何が起きたのか分からず面食らっている敵を尻目に敵の腕を取り粘着糸で背中に貼り付ける。敵がようやくもう片方の腕を振りかざして殴りかかろうとするがそんな大ぶりで遅い動きが普段から道場の大人達と手合わせしている私に当たるはずがなく屈んで避けてそのまま足払いをかけて俯せに倒す。

両足を粘着糸で固定しもう片方の腕も背中に固定し、用心して体も床に糸で固定した。

タイミング良くヒーロー達がやって来た。

ヒーロー達は敵を私が捕縛していたからかとても驚いていた。

助けた女の子にお礼を言われて周りにいた人たちにも賞賛された。

ヒーロー達には褒められてさらには将来是非うちの事務所にと勧誘もされた。

家に帰るとお父さんとお母さんに抱きしめられた。

二人の私を抱きしめる腕は震えていて私は今になって二人に多大な心配をかけてしまった事に気づいた。

心から反省して謝るとお母さんが「仕方ないわね。だって弦は将来ヒーローになるんだから。」といつて笑った。この事件をきっかけにお母さんは私がヒーローになることを認めてくれた。

この事件はちよつとした話題になった。

外に出れば注目され学校ではクラスメイトに詰め寄られた。

道場でもいつも厳しい先生に褒められてこれ以上褒められると調子に乗ってしまうと思い自分を戒める様に

今回は敵も一人で冷静でもなく動きも大ぶりの素人だから倒せただけで私自身はまだまだ未熟者なので今回の事で調子に乗らずによりいっそう精進しますと言うとまた先生に褒められて、さらには相澤さんにも今の心構えと体捌きを褒められてにやけてしまった。

お願いだからこれ以上は褒めないで欲しいと思った。

私は家族からのバックアップも受けて今まで以上に努力した。

訓練もだけど勉強も中学に上がる頃には高校生レベルまでやり始めていた。

それから原作でオールマイトがヒーローの活動は奉仕活動だと言っていたのを思い出して外にいるときは個性の訓練も兼ねて糸でゴミ拾いをしたり困っている人を見つけては助けたり手伝ったりした。

そしたら近所の人や助けた人達からも応援されるようになった。

なんとなくだけヒーローってこういうことなんじゃないかと漠然と感じた。

そんなこんなでようやく中3になりました。

2. 親友、それはフラグ

中3での進路調査でももちろん雄英高校を選択した。

成績も勉強の甲斐あつて学年トップだし先生も当然という風に頷いていた。

帰り道を上機嫌で歩いてたら表情には出してないのに一緒に下校してた親友にバラた。解せぬ。

そしてやって来ました！雄英高校一般入試!!

今日は実技試験日、原作第3話である！

周りを窺い原作キャラを見つけたたびに内心超はしゃいでます。

一緒に入試を受ける親友の方に顔を向けると怪訝そうに見てくる。

「親友よ、私は今超絶スーパーファイナリティに興奮してるんだがどうしようか？」

「いや、知らないしどうもするなよ。」

親友のCOOLな反応に傷ついたので幸せな記憶でやり過ごす。

ちなみにどういいう記憶かというと、つい先日道場で相澤のお兄さんから「おまえなら

受かると思うが、まあ、がんばれ。」というお言葉を頂戴した記憶です。心から萌えました。きゅんきゅんしました。本当にありがとうございます。

プレゼント・マイクの最初の呼びかけにめっちゃ恥ずかしかつたが毎週ラジオを聞くファン魂からでかい声で「よーこそー！」って叫んだ。

本当にめっちゃくちや恥ずかしかつたがプレゼント・マイクが嬉しそうに褒めてくれたから良しとしておいた。だから隣で親友が他人の振りをしていたが傷ついてなんかない。本当さ。

出久くんとかつちちゃん発見！やばい、本物だ！生ものだ！！↑錯乱

あ、飯田くんが質問した！飯田くんこの頃受験でピリピリしてるから怖い人みたいなんだよね。でも私は飯田くんも好きだよ。手の動きとか面白いしね。

そんなこんな考えてたらプレゼント・マイクの説明も終わり私も指定された演習場に行った。

ちなみに親友とは別の演習場だった。

演習場でも原作キャラがいないか周囲を見て探す。

あ！あれとどr「はい、スタートー！」ちくしょー！！プレゼント・マイクの声に反応

して脊髄反射で走り出した自分が憎い。

え？プレゼント・マイクに怒らないのだった？毎週ラジオを聞いてるリスナーの私がプレゼント・マイクに怒ることなんて相澤さんを貶されでもしなきゃありえないけど？

↑真顔

それにプレゼント・マイクのスタートの声にみんなが反応出来ない間に走り出せてアドヴァンテージ稼げたからいいのさ。

あ、敵発見。

突っ込んで来る敵のすれ違いざまに手足を糸で巻きつける。行動不能なのを横目で確認しつつ次へと思考を切り替える。

さてさて次の獲物はどこかなー♪

私は建物に糸を貼り付け空中を移動しながら敵を見つけては糸で巻いたり近くの建物と引っ付いたりしてポイントを稼いだ。

後はレスキューポイントも狙って怪我人とかのフォローをさり気なくしておいた。

そして現れましたよ、お邪魔トリオならぬお邪魔ギミックくんが。

あ、3人くらい逃げ遅れてるな。では、弦、いつきまーす！

糸で3人を回収して逃がしてギミックくんがこっちに向かってきているので私はまた空中を移動しながらギミックくんの注意を引きつけた。

動きが大きいおかげで油断しなければ捕まる心配もないので周りをハエよろしく飛び回り時間は掛かったが糸でギミックんの足をひとつに束ねてぐるぐる巻きにしてやったぜ☆

「終了ー!!」

ふーつと一息ついて地面に着地する。

ひとまず不合格って事はないだろと考えつつ息を整えているとさつき助けた子にお礼を言われた。

思わずにやけてしまった。やはりお礼を言われるのは嬉しいものだね。その日は親友と帰宅してお父さんとお母さんに試験の事を話して寝た。

通知が届いた。

開けるとプレゼント・マイクがハイテンションに合格だと宣言した。

私はすぐにお父さん達に報告した。

二人に思い切り抱きしめられた。少し苦しかったけど嬉しかったし二人の愛情に久しぶりに泣いてしまった。私は本当にお父さん達の子に生まれて幸せだなと思った。ちなみにその日はすき焼きだった。

くく

実技総合成績

第2位 石 弦

敵ポイント 31

レスキューポイント 45

合計ポイント 76

くく

く

はつつ登校く、はつつ登校く♪今日はたつのしいはつつ登校く♪

私は原作の雄英の制服に身を包み心はスキップしながらしかし表面上は普通に歩いて登校してます。

隣の親友の何かを諦めた視線すら気にならない程に気分が良かった。

合格報告を道場の先生にもしたらめちやくちや頭撫でられた。他の門下生のお兄さん達（ムキムキマツチヨ）にも囲まれておめでとうと言われた。

ドナドナが聞こえてきた事は私と皆との秘密さ☆皆って誰だ？

相澤のあんちゃん合理的ない動きだったと褒めてくれてさらには頭をポンとされて全私がときめき、きゅん死にした。

もう相澤さんは天使だよ！もさいけど。本当にイケメンだよ！もさいけど。

とかなんとか考えてたら学校に着きました！いえーい！ちなみに私はA組だよ、やったね☆

親友と別れて無駄に広く長い廊下を歩く。

まあ入試の時から思ってたけどこの学校あほみたいに広いよね。

演習場が町レベルの広さでそれがA〜Gまで6つあるとか規格外もいとこですよね。

なんとか迷わずに教室に着いたが扉もでけえ……。

これは、あれだよ。個性故に体が巨大な生徒とかに配慮したんだよ。そうだよ、そうに決まってる……。

私は一体何に対して言い訳してんだ？

私は気を取り直して扉を開けた。

3. 主人公は実は有名人

扉を開けるといくつもの視線に扉を閉めたい衝動に駆られる。

しかしそこは私の数多の特技の一つポーカーフェイス（極度の人見知りによる表情筋の職務放棄）で平然と教室に足を踏み入れる。

教室内の原作通りのメンバーに手頃な人にローリングソバットをキメたくなる。

落ち着け私！そこは逆の字固めで我慢するのよ！↑錯乱

テンションが上がりすぎて思考があれになっていると人の近づいてきて正常な思考に戻る。

「俺は私立聡明中学出身の飯田天哉だ。」

飯田くん!!!マジ飯田君だ!!!超四角い！手の動きが変！飯田君だ！

「私は市立名部中学出身の石弦。よろしく。」

「ああ、よろしく！君もやはり雄英に来たんだね！」

君も？やはり？荒ぶっていた思考が落ち着き頭に疑問符が浮かぶ。どゆこと？

「君の活躍はヒーローネットですいつも見てるよ。同年代で同じくヒーローを志す者とし

て君の存在には一目おいている。だが、雄英に入学した以上は同じクラスメイトとして君にも負けるつもりはない！お互い切磋琢磨しがんばろう！」

ああ、ヒーローネットでの奴ですか・・・。

私は4年生の頃のあの事件以降も敵に遭遇したり助けを求める人に出会い、ヒーロー志望としてももちろん、出来る範囲かを判断してからだけど、敵を捕まえたり助けたりした。

すると4年生の事件で名が少し知られていた私は事件に関与するたびなぜだかメディアに取り上げられた。

遂には最も閲覧者の多いインターネットサイト、ヒーローネットに中学生の頃から事があげられる様になり、面白がったメディアから今最もヒーローデビューを期待されている存在（ルーキー）という心から有り難くないキャッチコピーをいただいたのだ。本当にやめて欲しい。

普通ならヒーローを目指す者としてメディアに取り上げられる事を喜び誇りこそすれど嫌がるなんて以ての外だが私は前世からの性格故に目立つことが大嫌いだ。

人の視線に晒される事が本気で苦手なのだ。

今思うと小さい頃の私は転生トリップした喜びと大好きな原作メンバーに会えるという事で興奮して目がくらみ一時のテンションに身を任せてしまっていた。目立つこ

ととか観衆の視線に晒される事を全く考えていなかった。

くっ！これも全部僕のヒーローアカデミアが面白いのが悪いんだ！！

ヒロアカがあんなに面白くなかったらトリップしても喜びも興奮もせずに冷静でいられたんだ！

ちくせう堀越め！いつか会えたなら絶対サイン貰うから覚悟しとけよ！！

私が思考に耽っていて無言だったため飯田くんを放置してしまった。

急いで頭を働かせて飯田くんの言葉に返事する。

「活躍と言っても自分のできる範囲で動いただけで私自身はそれほどすごいことをしたとは思ってないんだ。メディアが面白がっている節もあるしね。」

でもだからと言って私も負ける気はないよ。これからよろしく。」

ひとまず無難にいい奴っぼい返事ができてホッとする。

それから自分の席に行き座る。

私の前は耳郎ちゃんで後ろは瀬呂くんだ。

さて、誰か話しかけてくれないかな・・・!?

この入学して私は漫画で知っていたとはいえ実質初対面の人達だ。私から話しかけるなど笑止千万、無理難題もいいところである。

いきなり話しかけて仲良くなれる程のコミユ力なんて鷹の目持ちのHSKではない

私が持ち得る訳がないのだ!

しかしこうしていてもどうにもならないいつの間にかグループができていたら私はぼっちになってしまふ。寂しいと死んでしまふ事に定評のある私としてはぼっちだけは避けたい。

よし! 3, 2, 1で耳郎ちゃんに話しかけよう。目指せ脱ぼっち!!

大丈夫。私ならできる! できる! できる! 私ならできる! 私は太陽だ!!
失敗する未来しか見えないのはなんでだろう?

よし、話しかけるぞ!

3, 2, 1! 「ね「机に足をかけるな!」おう・・・。」

飯田くーん!!! かつちゃんに注意するのは知ってたけどタイミング!!

もう完璧に私の残り僅かな勇氣は霧散し話かけるといふ選択肢も消え去った。

い、いいもん! この後だって話すチャンスなんていくらでもあるんだから! あれ、これフラグ?

もう諦めて原作の光景を傍観する事にした。

あ、出久くん来た。

王道的选择された主人公。突然だけどそれが私が出久くに抱いてる印象だ。

これは別に悪い意味での印象じゃない。なぜなら彼には選ばれるに足る理由があったと私は思うからだ。

出久くんは無個性という絶望の中でもヒーローという夢を諦めなかった。

これがどれほどすごいことかこの世界に生まれて本気で無個性というのがヒーローを目指す者にとって如何に絶望的な事を理解したからこそ言える事だ。

個性を持つている事が一般的なこの世界では無個性とはつまりは一般人以下なのだ。場合によっては一般人の方が役に立てる程に個性の有無とは重要なのだ。

例えば武道を極め様とも無個性では遠距離中距離の個性やかっちゃんや斬島くんのような近距離でなお強力な個性の敵が現れば鍛え上げたそれも何の意味もなくなる。

例え原作の発目ちゃんが作っていた様な機械を使おうとそれを壊されてしまえば無力になる。

無個性とはこの超人社会において、それだけで圧倒的弱者であるという証明に他ならないのだ。

その無個性に生まれながらヒーローになるという夢を諦めなかった出久くんは悪く

いえば現実を見ていない馬鹿だが良くいえば主人公として必要な「諦めの悪さ」という資質を持っていると言えるのだ。

もちろんオールマイトに出会えた事は幸運という外にないが、それでも彼は、出久くんは、あのかつちゃんやんがへドロに襲われているあの場面において、憧れのオールマイトに現実を見るとまで言われてなお、諦める事を選ばず、助ける事を、走ることを選んだのだ。

私はそれだけで僕のヒーローアカデミアの主人公として、オールマイトにワン・フォア・オールの後継者として選ばれるに足るだけの存在であると思う。

長々と何が言いたいかというと、だから私は漫画を読んでいた前世の頃も好きだったが、転生した今は前以上に出久くんの事を尊敬しているということだ。

あ、出久くんの素晴らしさを語っていたらお茶子ちゃんが来た。めつちや可愛い！さすがメインヒロイン！肉球ぷにぷにさせ欲しいわ。

って、あ！

「お友達ごっこしたいなら余所へ行け。」

相澤さんキターー!!!寝袋に入って芋虫みたいで少し気持ち悪いとか思っごめんね!!

でも素敵だよー!!なんで10秒飯食ってんのか分かんないけど格好いい!!!
相変わらずもさいけど最早そこすら可愛いと思えてきて自分でも末期だと思うよ。

「担任の相澤消太だ。よろしくね。」

あ、目が合った。にっこり笑っておく。手も振りたいがグツと我慢する。

よろしくねとか可愛すぎるよ!狙ってんの!?!あざといが可愛いから許す!

「早速だが、体操服着てグラウンドに出ろ。」

「これから始まる個性把握テストに向けて相澤さんに格好悪いところを見せないように気を引き締めた。」

4. 出久くんはやはり主人公だった

個性把握テストなう。・・・なうって今使ってる人いんのかな？

相澤さんの話を聞き逃すまいと黙って聞く。

雄英は自由な校風が売りかあ、自由過ぎる気もするけどね。

でも先生側もまた然りの言葉に納得する。だって相澤さんはマジで合理主義だから。

「爆豪、中学の時ソフトボール投げ何mだった？」

「67m。」

説明の途中でかっちゃんのターンになる。

かっちゃんてずっと俺のターンで素で言いそうだよな。ずっと俺のターンなんだよボケエ!!!みたいな感じで言いそう。余談さーせん。

「じゃあ『個性』を使ってやってみる。円から出なきや何してもいい、早よ。」

早よとか可愛いな、30歳。

「思いつ切りな。」

かっちゃん投げげるモーションに入る。

「んじゃまあ、……っ死ねえ!!!」

……死ね？

言うのは知っていたがリアルで聞くと想像以上でなんか思わず驚いてしまった。

途中文部省を貶しつつ説明は続いていく。

「まず自分の「最大限」を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段。」

最大限、か。

なるほど確かに道場では入った最初は自分の限界を知る様にいきなり走らされたもんな。あの道場に相澤さんがいたことに納得した。

クラスのみんなは個性を使った体力テストに興奮して盛り上がっている。

私は糸をどういう利用をするかを考えて、それからどの程度見せるかを考える。

入学してすぐの初対面の状況で出久くんとかっちゃんのように幼なじみだったり親友の様に同中だったりそういう個性でもない限りはお互いの個性をもちろん知らない。むしろ知ってたら怖い。

つまりここで個性が活かせるすべての種目で全力を出して個性の情報というアドヴァンテージを捨てるか、最低1種目ヒーロー科に相応しい結果を出してアドヴァン

テージを得る事を取るかだ。

そんな風に私が思考している間に話が進んでいく。

「・・・面白そう・・・か。ヒーローになる為の三年間そんな腹つもりで過ごす気であるのかい？」

相澤さんの迫力に全員に緊張が走る。

「よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し除籍処分としよう。」

前髪を手で上げる。

「生徒の如何は『先生』の自由。ようこそこれが、雄英高校ヒーロー科だ。」

最下位除籍宣言にお茶子ちゃんが反論する。

「最下位除籍って・・・！入学初日ですよ!?!いや初日じゃなくても・・・理不尽すぎる!!」
相澤さんはそれにも極めて冷静に答えていく。

「自然災害・・・大事故・・・身勝手な敵たち・・・いつどこから来るかわからない厄災。
日本は理不尽にまみれている。」

そういう理不尽（ピンチ）を覆していくのがヒーロー。

放課後マックで談笑したかったならお生憎、これから三年間雄英は全力で君たちに苦

難を与え続ける。

“Plus Ultra”さ。全力で乗り越えて来い。」

全員に適度な緊張感が走り気合いを入れ直す。

私もいろいろ考えてたが結局は全力でやる事にした。

相澤さんの言葉にやる気が出たと言うのもあるが、よくよく考えると相澤さんは私の個性を詳細まで知っているので手を抜いたらすぐにバレてしまうし、それ以前にメディアで取り上げられた私は個性を知られている事を思い出したのだ。

最初から手を抜くという選択肢は消えていたのだ。

斯くして体力テストが始まった。

第1種目：50m走

ヨーイ！START！の声に合わせてコースの半ばに糸を貼り付けそのまま飛ぶ。

「3秒85!!」

第2種目：握力

ここはごく普通に測定をする。

48kgw

「540キロて!!あんたゴリラ!?タコか!!」「タコつてエロいよね・・・。」
何にも聞こえなかった、決して聞こえてなんかいない。

第3種目：立ち幅跳び

50m走の時の様に糸を伸ばし今度は限界の50mまでの所に貼り付け地面すれすれを飛ぶ。

「121m!!」

第4種目：反復横跳び

これも普通にこなす。

「61!」

「ひゅううう!!」私は何も見ていない。

第5種目：ボール投げ

「相澤先生。これってボールは円から出ても良いですか？」

「体が出なきや別にいいぞ。」

後ろに誰もいない事を確認をしてボールに糸を着けて後ろに限界まで伸ばす、そして伸びた糸が戻ってくるのに合わせて腕も前に出してボールが糸の限界地点に到達すると同時に糸を解除する。

「1018. 5 m!」「1 km 超えたぞ!!」「立ち幅跳びもすごかったしどうい個性だ!?!」

思いの外好成绩が出て自分が驚いた。まさか1 km を超えるとは……。

そしてテストが進むにつれ顔色が悪くなっていった出久くんの番になった。

彼は原作通りここまで普通じゃない目立った成績を残せていない。顔色は最悪で下を向いている。

何かを決意したような切羽詰まったような表情で腕を振りかぶり投げる。

「46 m」

出久くんの顔が絶望に染まる。

そして困惑したように両手を見る。

「な……今確かに……使おうって……」

「個性を消した。」

相澤さんの声が響き全員の視線が相澤さんに向く。

「つくづくあの入試は・・・合理性に欠くよ。おまえのような奴も入学できてしまう。」
私はヒーロー科に落ちて普通科に進学した親友の顔を思い出して拳を強く握った。

「消した・・・!!あのゴーグル・・・そうか！」

抹消ヒーロー、イレイザーヘッド!!!」

クラスのみんなは相澤さんの事でざわざわしていた。

「見たとこ・・・個性」を制御できないんだろ？」

また行動不能になって誰かに救けてもらうつもりだったか？」

「そっそんなつもりじゃ・・・！」

「どういうつもりでも周りはそうせざるを得なくなるって話だ。」

捕縛武器で相澤さんが出久くんを引き寄せる。

「昔、暑苦しいヒーローが大災害から一人で千人以上を救い出すという伝説を創った。

同じ蛮勇でも・・・おまえのは一人を救けて木偶の坊になるだけ、

緑谷出久、おまえの「力」じゃヒーローにはなれないよ。」

相澤さんの言葉に出久くんは顔を強張らせる。

ボールを持ちぶつぶつ言いながら位置に着く。

そしてボールを投げる。

腕一本を犠牲にする力まかせの一振りではなく、指一本に力を最大限で最小限に込めて！

「今！」

705. 3m

出久くんは拳を握りしめ、歯を食いしばりながらも強く言い放つ。

「先生……！まだ……動けます!!」

私の体に電流が走ったような衝撃が襲い、腕に鳥肌が立った。

これが、これが緑谷出久……!!

私はこの時になって、緑谷出久の覚悟を見て、彼を、一部を除く前世から知っていた人達を、漫画の登場人物ではないのだと、現実で生きている“人”なのだとして理解した。

それから、残りの種目も計測して全種目終了・・・

相澤さんの除籍は合理的虚偽発言に出久くん達が驚いている中、私は自己嫌悪をしていた。

この世界に生まれて15年も経っていて、彼らを漫画の登場人物だと、そこで生きている人であることを理解できていなかったのだ。

彼らを生きている人としてみていなかった。

いくら前世から知っていたとはいえ今を生きている彼らに対して失礼だし最低にも程がある。

「石。」

自然と下がっていた目線を上げると相澤さんと目が合った。

「書類の不備について話があるからちよつと来い。」

「はい。」

相澤さんについて行く。

相澤さんは校舎の陰に行くと言ち止まって私の方を向いた。

「何落ち込んでんだ？」

やはり相澤さんには気づかれていた様だ。

でも相澤さんに前世の事も話してないから理由そのものは話せないし、自己嫌悪している事も話したくなかった。

思わず黙ってしまい合理的ではないことをしてしまいさらに自己嫌悪をして勝手に泣きそうになり堪える。

「話したくないなら無理に話せとは言わんが勝手に一人で思い詰めるなよ。」

相澤さんが私の頭を撫でる。

その手も言葉も暖かく堪えていた涙が自然と頬を伝う。

私は泣いていることを誤魔化すように言った。

「あ、いざわさん……書類の不備は？」

「おまえを手つ取り早く呼び出す合理的虚偽だ。」

「ふつ、嘘つくなんて、酷いなあ……。」

嘘なんて気づいていた。

けど、今だけ相澤さんの優しさに、この優しい手に甘えさせて貰う。

家に帰る時に、また笑って帰れる様に。

~~~~~  
体力テスト順位

1 八百万 百

2 石 弦

3 轟 焦凍

4 爆豪 勝己

5 飯田 天哉

6 常闇 踏陰

~~~~~

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

5. 恵まれているという事

朝、起きてジャージに着替える。

顔を洗って鏡に映る自分を見る。

ゆっくり深呼吸をして自分を落ち着かせる。

漫画で出久くんが、人に恵まれたと言っていたが私こそ恵まれていると思う。

ヒーローへの夢を全力で応援してくれて愛してくれる両親に恵まれた。

相澤さん達のような道場の厳しくも優しく鍛えてくれる先生に恵まれた。

私を理解してくれて同じ夢を追いかけている親友に恵まれた。

私は本当に恵まれて、いや恵まれすぎている。

こんなに私を応援してくれる人達がいて私はとても幸せだ。

それなのに一人で勝手に悩んで泣いてうざいにも程がある。

自分の昨日の醜態に頭を抱えて悶えそうになるがグツと堪える。

昨日みたいに勝手に悩むのをやめよう。

昨日は自分が出久くん達の事を紙面上のキャラとしか見ていなかった事に気づいて自己嫌悪したけどそれも終わり。

ポジティブに考えて、敵襲撃事件の前に気づけて良かったと考えよう。

もしそのタイピングで気づいたら今回の様に相澤さんにフォロワーして貰う事なんてなかっただろうし、もつとうだろうだして塞ぎ込んでいたと思うし、私は早々に気づけてかなりラッキーだった。そう考えることにした。

「よしーうだろうだしない！」

顔を両手でぱんつと叩いて気合いを入れてニツと笑う。

いつもの日課でランニングをしながら糸でゴミを拾い困っている人がいないかを確認する。

「おはよ、弦。相変わらず早いね。」

「おはよ。人使こそいつもより早いじゃん。」

いつもより早くやって来た親友に本当に恵まれてるなあと思いき自然と口元が緩んだ。

親友、心操人使はそんな私を横目で見るとすぐに前を向きぶつきらぼうに言う。

「どっかの馬鹿が昨日みたいな面白い顔してないか見に来ただけだよ。」

「うわ、ひつどい奴。」

昨日の帰りも少し遅くなった私の事を待っていて一目で落ち込んでるのを見破られた。

この親友は普段はキツイが私が落ち込んでいたりするとすぐに気づいて不器用に言葉をかけてくれる。

私の周りには本当に恵まれていると改めて思った。

人使と日課のゴミ拾いランニングをしていると散歩をしている人達ともすれ違う。

「おはようございます！」

「おはよう！今日もがんばってるね！」

「ありがとうございます！」

笑顔で応援してくれている町の人に思わず呟く。

「恵まれてるなあ……。」

「そうだね。」

珍しく素直な人使に驚きつつ朝の道を走った。

雄英に登校し先に相澤さんに昨日の事で謝罪をした。

「おまえに迷惑かけられるのなんて今更なんだからいちいち謝るな。」と言われた。

相澤さんの相変わらざるイケメンぶりにときめいた。

クラスに行くときあいさつされて驚いた。

ふむひとまずぼっちフラグは回収せずに済みそうにホツとした。

午前は話し方以外ごく普通なプレゼント・マイクの英語などの必修科目の授業を受けた。

昼になり、なけなしの勇気を振り絞り朝あいさつしてくれた梅雨ちゃんと芦戸ちゃんを誘って一緒にランチラッシュのご飯を食べた。ランチラッシュの料理はマジで美味しかった。

無事脱ぼっちができて良かった。

そしてやってきました、午後の授業！

ヒーロー基礎学!!

「わーたーしーがー!!普通にドアから来た!!」

生オールドマイトは濃かった!そして濃かった!画風も違った!出久くんの時とは違う意味で鳥肌たった。

「ヒーロー基礎学!ヒーローの素地をつくる為様々な訓練を行う科目だ。」

早速だが今日はコレ!! 戦闘訓練!!!」

戦闘訓練! わくわくして腕に自然と力が入る。

「そしてそいつに伴って・・・こちら!!!」

クラスの間が動き出してくる。この設備に一体幾らがかかっているだろうか・・・考えるのをやめよう。

オールマイトの言葉にみんな立ち上がり戦闘服に着替えに行く。

私も自分の戦闘服を持ち梅雨ちゃん達と着替える。

「格好から入るってのも大切な事だぜ少年少女!!」

自覚するのだ!!! 今日から自分は・・・・・・ヒーローなんだと!!!

さあ!! 始めようか有精卵共!!! 戦闘訓練のお時間だ!!!」

被服控除で要望通りの戦闘服に気分が高まる。

私の戦闘服は、かかし先生が着てる口布付きの紺色の服のノースリーブタイプに腕には同色で指先まであるアームカバー、その上にクリーム色のインディアン風のポンチョ

を被っていて、七分丈のズボンに黒いメンズのグラディエーターサンダルを履いている。

忍者をイメージした戦闘服を要望したが詳細まで絵を描いたのが正解だった様だ。

ただノースリーブの背中部分がかつり布がなくて素肌が見えている事だけが気になる。

雄英のサポート会社はどうしてもエロい部分を作りたい様だ。

趣味だろうか？

みんなの戦闘服も素敵だなあと見ていると飯田くんの質問からオールマイトの話が始まった。

「屋内での対人戦闘訓練さ!!!」

敵退治は主に屋外で見られるが統計で言えば屋内のほうが凶悪敵出現率は高いんだ。」

「監禁、軟禁、裏商売・・・このヒーロー飽和社会、真に賢い敵は屋内にひそむ!!」

君らにはこれから「敵組」と「ヒーロー組」に分かれて2対2の屋内戦を行ってもらおう!!」

「!!?」

知っていた事でも少し緊張する。

深呼吸を軽くして力を抜いておく。

そういえばA組は私を入れて2人だけどう分かれるんだろう？

「先生！クラスは全員で2人で1人余ってしまいますがどうされるのでしょうか!？」

あ、飯田くんが聞いてくれた。さすがだね☆飯田くん！

「1人はどこかの組に入って3人でやってみよう!!」

「多数の場合の訓練という事でしようか?」

「そうさー石少女の言った通りだぜ!!!」

思わず確認してしまったが普通に返してくれた。流石オールマイト、優しい。

その後みんなも一斉に質問しオールマイトが聖徳太子と言ってるのと核兵器というアメリカな設定やオールマイトのキャンペに少し笑ってしまった。というか青山くん、そこは質問しようぜ……。

くじを引くと私だけ何も書いてなくて組に加わるのは私になった。マジか。

オールマイトがくじを回収してもう一回引いて出たのはD。

飯田くん・かつちゃんコンビだ。マジか。

あいさつする間もなく対戦相手の発表に移る、マジで早い。

「続いて最初の対戦相手は、こいつらだ!!!」

Aチームが「ヒーロー」、Dチームが「敵」だ!!」

いろいろ不安だがオールマイトの言葉を聞いてから建物の中へ入って行く。

「改めて石弦です。個性は粘着糸。手から粘着性のあるガムみたいな糸が出せる。よろしく。」

ひとまず自己紹介してコミュニケーションを図る。

「二回目だが飯田天哉だ。個性はエンジン。6速まで速度を上げられる。よろしく頼む！」

飯田くんはきっちり返してくれたが問題は今出久くんにご執心なかつちゃんこと爆豪くんだ。

「おい、デクは“個性”が・・・あるんだな・・・?」

まさかの完全☆スルーでした。さすがかつちゃん唯我独尊!

「爆豪くん!今は君の自己紹介の番だぞ!」

おう飯田くん今は注意やめたげてよお!

「んなことどうでもいい!! テクに “個性” があるかどうかを聞いてんだよ!!」

「どうでもいいだど! き m 「飯田くんいいから落ち着いて!」 せ、石くん。」

このままだと火に油ならぬ爆豪に油で爆発しそうなので割り込ませてもらった。

「緑谷くんの “個性” なら体力テストで使ってたしパワー系じゃないかな？」

今は制御しきれてないみたいだけどね。」

「クソナードが・・・!!」

めっちゃ怖いです。はい。マジで人を殺せそうな顔してましたよ、やだー。

「爆豪くんは難しそうだしこっちで軽く打ち合わせしとこうか。」

「だが・・・しかし!」

「ここで無理に話しても今の爆豪くんは聞いてくれないと思うよ。」

だから爆豪くんが独断専行することを視野に入れて私たちがフォローしていく方がいいと思うんだ。」

「!! 確かに石くんの言うとおりで! 俺はどうやら視野が狭かったようだ。さすが石くんだ。」

「そんなことないんだけど・・・まあ、ありがとう。」

で、ちよつと考えたのが「・・・」。

↓
屋内対人戦闘訓練
開始
↓

6. 普通に捕まえました

開始と同時に走り出した爆豪くんには思わず乾いた笑いが漏れる。

「やっぱ独断専行したね・・・爆豪君。」

「石くんの言っていた通りいきなり飛び出して行くとは何なのだ彼は！もう!!」

飯田くんはぶんすかしていた。

「まずは打ち合わせ通り片付けようか。」

「ああ！本当に石くんと同じチームで心強いよ！」

「ありがとう。私も飯田くんと組めて心強いよ。」

飯田くんの怒気も和らぎ片付けに移る。

打ち合わせではこんな感じに決めといた。

まずお茶子ちゃんの触ると浮かす個性、無重力対策にフロアの物を片付ける。

おそらく独断専行するかっちゃんはお出久くんに集中しお茶子ちゃんを通してしまふ。

機動力のある飯田くんメインの守備を任せ、応用力がある個性の私が核の近くの天

井に糸で貼り付き入り口の見張り兼不意打ちをするという風に役割分担をした。

不足の事態には私が核の守備、飯田くんがヒーローの捕縛を優先するよう決めた。

「ここまではまるで予想通りに飛び出したかつちゃんのお陰？で予想通りに事態は進んでいるようだ。」

「じゃあ私は隠れるね。」

「ああ、頼んだよ！守備の方は任せてくれ！」

「うん、任せた。」

片付けが終わわり糸を伸ばし天井に貼り付くと片手で丸を作って見せる。

飯田くんは頷くと耳元に手を当てた。おそらく通信機を使うのだろう。

「オイ爆豪くん!!状況を教えたまえ!どうなってる!?!」

『黙って守備してろ……!ムカついてんだよ俺あ今あ!!』

「気分聞いているんじゃない!!おい!!切れた……!!マジか奴!!」

2回目の乾いた笑いが出たが仕方のないことだと思つて欲しい。

柱の陰から入り口を見張っているとお茶子ちゃんが来た。

柱を2回軽く叩く。あらかじめ2人なら1回、1人なら2回叩くと決めておいたの

だ。

飯田くんが前を向き直る。お茶子ちゃんとぼつちり目が合った。

「来たか麗日くん……！君が1人で来ることは爆豪くんが飛び出した時点で判っていた！

触れた対象を浮かしてしまふ“個性”、だから先程……

君対策でこのフロアの物を全て片付けておいたぞ！」

「これできみは小細工が出来ない！ぬかったなヒーロー！！フハハハハハ！」

飯田くんノツリノリだな。

真面目だからってここまでやるとか面白過ぎるな。

ドオオオオオオオオ
!!!!!!

飯田くんがジリジリ詰めていくのを確認していると建物が大きく揺れた！

「何だ!!?爆豪くんか!!?何をしているんだ彼は!!」

飯田くんが動揺したのを見てお茶子ちゃんが動いた。一気に飯田くんに向かって走り出す。

「ぬっ、させない！」

立ちはだかる飯田くんの頭上を飛び越えるお茶子ちゃんは真横の柱に隠れる私に気づいていなかった。

すつかり私の存在は頭から消えているようだ。べ、別に寂しくなんてないんだからね!!

「ま、それを狙ってたところもあるしね。」

粘着糸をお茶子ちゃんの体に貼り付け引き寄せる。

「うええ!!」

驚くお茶子ちゃんは対応が出来ず、私は冷静にお茶子ちゃんの両手を確保テープで拘束し糸を床に貼り付けて降り立った。

「確保完了。」

「うええ!!石さんの事忘れてたー!」

「ナイスだ石くん!!」

やっぱり忘れてたのね・・・いいけどさ。

いじける気持ちを抑えてこれからの事を考えて飯田くんに向き直る。

「爆豪くんの応援に行こうと思うけど麗日さんの見張りどうする?」

「み、見張り!?!」

「確保したのになぜ・・・?」

2人は困惑したように私を見る。飯田くんマスク被ってるから表情分からんけどね。「オールマイトが確保宣言してないって事は麗日さんの扱いは「人質」ということになる。敵ならせつかくのそれもヒーローの人質を1人で放置なんてしないでしょ？」

私の言葉に2人ともハツとした表情になる。だから飯田くんマス（ry

「そ、そっか！全然気づかなかったよ！！石さんすごい！！」

「そうだったのか！さすが石くんだ！！」

2人からの手放しに褒められて照れそうになるが堪えて言葉が続ける。

2人とも素直すぎていろいろと心配になってくる。詐欺とか普通にかかりそうだ。

「で、どっちが爆豪くんの応援に行く？」

「ならば石くん、君が行ってくれ！」

え？私？まだ働けど？

「悔しいが俺より石くんの方が冷静に動いている。だから石くん、応援は任せた！」

もちろんその間見張りは任せてくれ！核には触らせはしない！！」

ですよね、飯田くんがそんな酷い事言うわけないよね。

「了解させた。行ってくる。」

入り口に糸をかけてさっさとかつちゃん達の元へと向かった。

急いで移動したのですぐに一階に着いたが、もう帰りたいです。

「勝って!! 超えたいんじゃないかバカヤロー!!!」

「その面やめろやクソナード!!!」

はい。めっちゃ佳境です。

私が急いで来た意味!?! ない? ですよ! 分かつとるわ!!

「DETROIT・・・」

勢いよく走り出す2人。

お互いに腕を振りかぶり全力で向かっていく。

「麗日さん行くぞ!!!」

「ごめんお茶子ちゃんもう確保済みです。」

「SMASH!」

BOOOM!

かつちゃんが嘩然として出久くんが倒れ行く中に隠れてる訳にもいかないから出て行き出久くんを抱きとめて、一応確保テープをそつと巻く。

『敵チーム・・・WIIIIIIIIIN!!』

こうして私たちの訓練が終わった。

出久くんがハンソーロボに連れて行かれて行かれて私、飯田くん、お茶子ちゃん、かつちゃんはモニタールームに戻った。

「今回のベストは石少女だ!!!」

クラスみんなはそうだろうと言うようなりアクションをしていた。

私は内心で首を傾げていた。どうしてこうなった？

「何故だか・・・分かる人!!!」

「ハイ、オールマイイト先生。」

発言したのはセクシーな戦闘服に身を包む八百万女史だ。

「それは石さんが一番状況に合わせて冷静に動いていたからです。

爆豪さんの行動は戦闘を見た限り私怨丸出しの独断。そして先程先生も仰っていた通り屋内での大規模攻撃は愚策。

緑谷さんも同様の理由ですね。

麗日さんは飯田くんに集中するあまり石さんの存在を失念していたこと。

石さんと飯田さんは特にミスもなく対応出来ていました。差があつたとすれば最初に言った通り捕まえた後の冷静な状況判断力と動きの迅速さでしょう。」

しーりん……

「まあ……正解だよ。くう……!」

「常に下学上達!一意専心に励まねばトップヒーローになどなれませんので!」

八百万女史優秀すぎい……。

オールマイイトが素で戸惑ってるよ!やめたげてよお!

その後、他のみんなの訓練の様子を見ていた。

轟くんの個性がチート過ぎて内心どん引きしていた。

障子くんの個性も便利だなあと見ていたが轟くんのが衝撃的過ぎた。

あれは、あかん……。

それから訓練がが終わった。

オールマイトの言葉を聞いて戦闘服を着替えて教室に戻った。

教室ではみんなで自己紹介してから今日の訓練の反省会をした。

「石はめっちゃ冷静だったよな!!」

聞き役に徹していたらいきなり話を振られてびっくりした。

「お茶子ちゃんに確保テープ巻くのもめっちゃ早かった!!」

「すごいや石は敵を捕まえた事あるんだもんな!!」

やっぱ実践は訓練と比べもんになんねえくらいすげえのか!」

上から斬島くん、三奈ちゃん、砂籐くん。3人とも勢いが半端なかった。

さらに砂籐くんの言葉を皮切りに今までのメディアに取り上げられた事件の事も聞かれてめっちゃ必死に頭を回転させて答えた。

答えていく度に素直な賞賛の言葉を浴びるので恥ずかしくて仕方なかった。

出久くんが来た事で話題は私からそれたのでみんなにあいさつをして教室を出た。

明日もがんばろう！

7. 遮られる事に定評のある主人公

朝になり人使といつもの日課を終えると登校した。

正門に連日群がる報道陣を見て人使と同時にため息をつく。

「朝からやめて欲しいわ．．．。」

「暇なんだろ．．．。」

今からあそこを通り抜けると思うと憂鬱過ぎてテンションが驚く勢いで下がった。

もはや報道陣が1匹いるとその30倍はいると言われる漆黒の存在に思えてくる。要するにそのレベルでうざいということだ。うざい。

意を決して通り抜けるとすぐにマイクを向けられた。

「オールマイト．．．ってあなたは今最もヒーローデビューを期待されているルーキーの石弦さんよね!？」

うええ、バレた!!めんどくせえ!!頬が自然と引きつっていく。

「人違いです。」

「やっぱり雄英に進学したのね!お話聞かせて!!」

話聞けや!!!てか今から学校なのにお話してる時間なんかないわ!!!

しかし現実は無情で女記者がでかい声で言ったお陰で周りにも張れて詰め寄られる。

「ぐうえ・・・人使助け・・・」

助けを求めて人使を見ると私に詰め寄る記者の後ろを通っていて目が合うと口パクで何か言った。

「お、と、り、さ、くせ、っておまえ私を囮にしてんじやねえ!!!」

「お話聞かせて!!!」「こっちに目線ください!!!」「この前の事件だと・・・!!」

私の叫びは詰め寄る記者の声で埋もれ人使の耳に響くことはなかった。

人使は私を囮にさっさと先に校門を通り抜けて先に行った。

あの野郎・・・せいぜい夜道に背後に気をつける事だな!

その後なんとか振り切り校内に入った。・・・疲れた。

廊下を歩いていると相澤さんに会って下がっていたテンションが上がり限界突破す

る。

「相澤さん！おはようございます！」

気怠げに振り返る相澤さんマジ格好いい!!横に並んで歩いてるだけで笑顔になってしまおう!

人使？奴と歩いてて笑うのはふざけてる時くらいだ。

だいたい常ににこにこしてたら一言きもいって言うてくるからな！あの隈野郎!!ムキー!

「弦か、朝から元気だな。」

人使のせいでの苛立ちも相澤さんの一言で浄化される。ああ、癒やされる。

「相澤さんに会えたのでパワーチャージしました！」

「俺は栄養ドリンクか何かか。」

「存在が私の元気です！」

「アホか。」

ばっさり斬られたが相澤さんだから全然気にならない。

笑顔の私に相澤さんは呆れた様に薄くだけど笑う。

イケメン!!!何その笑顔!!格好良すぎ!!!殺す気か!?まあ何度か萌え死んだけどさ!!↑

相澤さんは漫画でいう実はちゃんとしたらイケメンキャラだよね!!

まあ私は今のままでも十分格好いいと思うけどね!!ロン毛も相澤さんならオールOKだ!

「ところで昨日の訓練のV見たぞ。」

背中に冷たい汗が落ちる。見たんだ……。

「手抜いてただろ。」

疑問系じゃ、ない、だと……!?

まさかバレている? いや、きっと大丈夫だ!!

ここは私の名演技で誤魔化してみせる……!!

「……ソナコトナイヨ。」

「おい……。」

「抜きましたごめんなさい!」

ここで謝らないと暫く相手して貰えなくなるので素直に謝る。

なぜバレたんだろう?

実は確保をすればいいあの訓練だと私はもつと早く終わらせる事が出来たのだ。

核の近くで待ち伏せをしたがお茶子ちゃん1人であることが予想出来ていたから私が入り口に糸で罫を張り、引つかかった所を入り口付近の天井で待ち伏せし確保すれば

お茶子ちゃんはその時点で脱落。

その後にかっちゃんの応援に行つて確保するのもお互いに集中していて隙だらけだったので簡単にできた。

それをしなかったのはあの訓練で出久くんとかっちゃんの双方が成長する場面だったからだ。

決して割り込んだ後のかっちゃんが怖いとかそんなんじゃない。本当さ！・・・たぶん。

私の個性を詳細まで知っている相澤さんでなければ気づかれる事はない程度には取り組んだのだがやはり相澤さんにはバレてしまった。

手を抜いた事を怒られるのではと戦々恐々とする。

「別に怒ったりするつもりはねえよ。」

ひとまずホツとし相澤さんを見ると、なぜか目を逸らして気まずそうにしている。はて？

「手を抜いた事を別に見ればチームプレーを優先していたとも言えるし確保時や移動の時なんかの動きは合理的だった。爆豪を無理にどうにかしようとしなかった点なんか合理的な考え方も出来ていた。

まあその、なんだ、よく・・・出来ていた、方ではあった・・・。」

「!？」

いきなり早口に捲し立てられたかと思えば褒められ、た・・・だと!？」

思わずジツと相澤さんを見れば表情が不機嫌そうになり目を逸らされた。

「・・・。」

無言でさつさと歩いて行く相澤さんにハツとして急いで追いかける。

表情筋が緩んでにやにやしてしまつた私は悪くない

やはり相澤さんは天使だつたようだ↑真顔

途中で分かれて教室に行きみんなにあいさつすると梅雨ちゃんに一発で機嫌が良いことがバレた。解せぬ。

「昨日の訓練お疲れ。Vと成績見させてもらった。」

ホームルームが始まり相澤さんが話し始める。さっきの事を引きずつてか私の方を向こうとしない。

相澤さん、貴様!照れているな・・・!!内心でジョジョ立ちをしながら言い放つ。

でもDIO様のあの立ち方リアルですと腰を痛めるんだよね。あの時は、痛かつ

た・・・(遠い目)

どんな背筋してんだろ？あんな反って平然と立てるなんてさすがD I O様だね☆・・・話が逸れてしまった。

馬鹿なことを考えてたら学級委員を決めるところまで話が進んでいた。

みんなは我こそはと手を上げているがもちろん私は上げない。

前にも言ったが私は目立つことが大嫌いだし雑務とか自分から進んでやろうとは思わない。

前世でも学級委員とは無縁でいたし今世でもやる気は一切ない。

「静粛にしたまえ!!」

みんなが声に反応して飯田くんの方を向く。

「多〃〃をけん引する責任重大な仕事だぞ・・・!」「やりたい者」がやれるモノではないだろう・・・!!

周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務・・・!民主主義に則り真のリーダーを皆で決めるといふのなら・・・

これは投票で決めるべき議案!!!」

「そびえ立ってんじゃねーか!!何故発案した!!!」

「っ!!!
!!!ww!!」

ww 飯田くんww 矛盾ww しすぎww、後ナイスww ツツコミww
フアーww 真面目にお腹痛いww お腹割れちゃうww

私のツボにドストライクで腹筋が崩壊した。必死に机に突っ伏し声を出さないように堪える。

みんなは盛り上がっていて爆笑から震える私の事には気づいてなかった。セーフ。セーフ。

その後投票する頃には落ち着いて無事投票出来た良かった。

ちなみに飯田くんに入れました。飯田くん驚いてたw

梅雨ちゃん達とお昼ご飯を食べていると警報が鳴った。

「なにかしら?」

「なになにー?!」

「なんだって、ちょ・・・!!」

言葉を遮られて訳が分からぬまま避難しようとする他の生徒の波に押されて巻き込まれる。

確かこれは校内に報道陣が入っただけだった筈だ。

私はひとまず右手の糸を天井につけて左手の糸を梅雨ちゃんと三奈ちゃんに着けて人の波から脱出した。

「ありがとう弦ちゃん、助かったわ。」

「ありがとう!!」

「ひとまず無事で良かった。．．．どうにかこの騒ぎを抑えないと怪我人が出てしまう。」
「そうね．．．。」

窓のある位置は私達の位置からだとし少し遠い。しかしこれほどの人が我先にと避難していて怪我人が出るのも時間の問題、迷っている暇はない。

「梅雨ちゃ「大丈夫ー夫!!!」．．．。」

飯田くんえ。今日は朝から遮られてばかりな気がする．．．。厄日か？

「ただのマスコミです！なにもパニックになることはありません、大丈夫夫!!」

ここは雄英!! 最高峰の人間に相応しい行動をとりましょう!!」

飯田くんの呼びかけに避難していた生徒は落ち着いた。

私の出番．．．。ない？ですよねー。

その後警察が到着してマスコミは撤退した。

それから出久くんの提案で委員長は飯田くんに決まった。

私達はこの時、まだ気づいていなかった。

今日の出来事が事故ではなく、悪からの宣戦布告であった事に。

8. 襲撃の悪意

今日も、いつも通りに登校し午前中の授業が受ける。

P M O : 5 0

「今日のヒーロー基礎学だが・・・俺とオールマイト、そしてもう1人の3人体制で見ることになった。」

相澤さんの言葉に手に力が入るのを机の下で隠す。

ついにこの日が来た。

前で話す相澤さんを私は見つめていた。

戦闘服に着替えてバスに乗る時、フルスロットルで仕切る飯田くんが面白くて思わず

吹き出した。

程良く力が抜けたお陰で緊張して動けないなんて事にならずに済みそうでホッとす
る。

「飯田くんありがとう。」

「いや、おれは委員長として当然の事をしているだけで礼を言われる程の事はしていな
いさー」

真意は当然伝わらなかつたし私の自己満足だがお礼を言えて良かったと思う。
言葉に反して嬉しそうな飯田くんにまた和んだ。

バスに乗り込み空いている瀬呂くんの隣に座る。

みんなの会話を軽く聞きつつ景色を見る。

「人気ついたら石とか人気出そうだよな!!」

またまた斬島くんからいきなり振られてそっちに視線を向ける。

「そうね、弦ちゃんはどうファンもいるものね。」

「そうなの!?!弦すごーい!!」

一気に視線が集まり内心でびびる。コッチミンナ。

「んー、ファンなのかな？近所の人とかにはランニングしてたら応援して貰える事はあ
るけどファンとは違うと思うしなあ・・・。」

「弦ちゃんはネットはあまり見ないのかしら？」

「いや、普通に見るけど自分のニュースとかは見ないね。」

梅雨ちゃんの言葉に考えながら答える。

「えー！見ねえの!？」

何人かに信じられないという目で見られる。コッチミ（ry

「応援して貰えるのは勿論ありがたいけど、注目されたくてやった訳じゃないから興味
ないんだ。」

実際は違うけどそれは秘密にしておく。

誤魔化す様に笑って言うとなぜか尊敬するような目で見られた。解せぬ。

「かつけえな!!」

「弦かつこいい!!」

「素敵ね。」

「正にヒーローを目指す者の鏡だ!!」

上から斬島くん、三奈ちゃん、梅雨ちゃん、復活した飯田くんだ。

みんなに一斉に褒められて真面目に自分が汚れていると思った。出久くんもみんな

もそんなキラキラした目で見ないで!!

目的地に到着しバスから降りる。

「すっげー!! USJかよ?!!」

「水難事故、土砂災害、火事・・・etc.

あらゆる事故や災害を想定し僕が作った演習場です。その名も・・・、

嘘(U)の災害(S)や事故(J)ルーム!!」

スペースヒーロー13号のネーミングセンスって秀逸だよな。

13号と相澤さんが話し始めた時にさり気なく13号の指を見る。

原作通り立てている指は3本で変化がないことに安心ではないがホッとする。

「えー始める前にお小言を1つ2つ・・・3つ・・・、4つ・・・」

話す内容定めとけと思ってしまった私は悪くない。

「皆さんご存知だとは思いますが僕の“個性”は“ブラックホール”、どんなものでも吸い込んでチリにしています。」

「その“個性”でどんな災害からも人を救い上げるんですよね。」

出久くんが相づちを打ち、お茶子ちゃんはヘッドバンしている。

「ええ…、しかし簡単に人を殺せる力です。皆の中にもそういう“個性”がいるでしょう。」

超人社会は“個性”の使用を資格制にし厳しく規制することで一見成り立っているように見えます。

しかし一歩間違えれば容易に人を殺せる“いきすぎた個性”を個々が持っている事を忘れないでください。

相澤さんの体力テストで自信の秘めている可能性を知り、オールマイトの対人戦闘でそれを人に向ける危うさを体験したかと思えます。

この授業では…・心機一転！人名の為に“個性”をどう活用するかを学んでいきましよう。

君たちの力は人を傷つける為にあるのではない。救ける為にあるのだと心得て帰って下さいな。

以上！ご静聴ありがとうございました。」

「ステキー！」

「ブラボー！！ブラボー！！」

素直にその通りだなと思った。

私の粘着糸も口と鼻に着ければ取るのはとても困難になり容易に窒息死させられる。首にかけて絞めれば絞殺も出来てしまう。

個性の危険性を改めて感じた。

「そんじゃあまずは……」

ズズ……ズズ……

「一かたまりになって動くな!!! 13号!! 生徒を守れ!!」

普段からは考えられない相澤さんの大きな声に瞬時に身構える。

……来た!

現れた敵の姿に背中にぞくりと悪寒が走る。

「何だアリア!? また入試ん時みたいなものもう始まってんぞパターン?」

「動くな！あれは、敵だ!!!」

状況を把握出来たみんなにも緊張が走る。

「どこだよ・・・、せつかくこんなに大衆引きつれてきたのにさ・・・。
オールマイト・・・平和の象徴・・・いないなんて・・・、
子どもを殺せば来るのかな？」

それは、途方もない悪意の塊だった。

「先生侵入者用センサーは？」

「もちろんありますが・・・!」

みんなの声を聞きつつも視線は敵を見る。一際大きい黒い敵を・・・。

「13号避難開始！学校に連絡試せ！センサーの対策も頭にある敵だ！電波系の“個性”
が妨害している可能性もある。上鳴おまえも“個性”で連絡試せ。」

「っすー!」

相澤さんの様子に思わずという風に出久くんが口を開く。

「先生は!? 一人で戦うんですか!? あの数じゃいくら「個性」を消すっていつても!!

レイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの「出久くん大丈夫だから。」つえ? 石さん?」

つい出久くんの言葉を遮ってしまった。

でも、これ以上聞いていられなかった。これ以上聞いていたら、私が耐えられないから。わがままを言っていいそうだったから口を出さずにはいられなかった。

「石の言うとおり問題ない。」

「芸だけじゃヒーローは務まらない。13号! 任せたぞ。」

そのまま飛び出す背中は大きくて、とても遠く感じた。

13号に続いて避難しようとした時前方に敵が現れた。

「させませんよ。」

「初めまして、我々は敵連合。」

せんえつながら・・・この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは・・・平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです、

本来ならばここにオールマイトがいらっしゃるはず・・・ですが、何か変更あつたの

でしようか？まあ・・・それとは関係なく・・・私の役目はこれ。」

瞬間、敵に向かって攻撃したのは斬島くんとかつちやんだった。

「その前に俺たちに、つてうおお!!」

糸を貼り付けて急いで2人を引っ張る。文句ありげに睨まれたが無視だ。

「危ない危ない・・・。そう・・・生徒といえど優秀な金の卵。

散らして

崩り

殺す」

そして広がった闇に私は視界を埋め尽くされた。

闇が消えるとそこは廃墟だった。

斬島くんとかつちちゃんもいた。

糸でつながっていた為一緒に飛ばされた様だ。

「来た来た!」「獲物はガキ3人か。」「ちやつちやつと終わらそうぜ!」

周囲の敵に身構える。数が多いことに舌打ちしたくなる。たくつ、ちやつちやつと終

わらすとか、

「こっちの台詞だつつかの！」

糸で敵を引つ張りそのままがら空きの顎を殴り気絶させる。

「まず1人。」

「てめえこのガキがああ!!」

私の言葉に逆上して突っ込んで来た2人目の攻撃を避け、そのまま腕を掴み背後からの敵に向かってぶん投げる。

「3人。」

冷静に呟く。

敵は警戒したのか突っ込んで来ない。ちらりと2人の様子を見るが問題はなさそう
だ。

「さっさと終わらせる・・・！」

呟いてから私は敵に向かって突っ込んだ。

「これで全部か、弱えな。」

周りにいた全ての敵を倒し終わりかつちゃんか呟く。

「つし！早く皆を助けに行こうぜ！俺らがここに居ることからして皆USJ内にあるだ

ろうし！攻撃手段少なえ奴等が心配だ！」

斬島くんとかつちゃんの話余所に窓枠に足をかける。

「勝手に悪いけど私は広場の方に行くから！」

「え!?おい!石!!」

斬島くんの声をバツクに廃墟が出る。

どうか！間に合って!!

n o s i d e

イレイザーヘッドの戦っていた広場には絶望が広がっていた。

さつきまでならば敵を1人1人確実に倒していきむしろ押していたと言えた。

だが突然背後から襲ってきた1人の敵「脳無」の存在が状況を逆転させた。

脳無の攻撃でイレイザーヘッドの右腕はまるで小枝でも折るかの様にバキバキに折られた。

水難ゾーンから敵を戦闘不能にし広場へと来ていた緑谷、蛙吹、峰田の3人もそのあまりに凄惨な光景に息をのみ動けないでいた。

そしてその光景から気づかされた。

自らの“力”では到底太刀打ち出来るはずがない“敵”であるということに。

脳無は折れた右腕にさらに力を込めて骨を粉碎させる。

「~~~~つ!!!」

イレイザーヘッドは声なき悲鳴を上げて苦痛に耐える。

そんなイレイザーヘッドにもう一人の敵“死柄木弔”が無感情に平坦な声色で話す。

「“個性”を消せる。素敵だけどなんてことないね。

圧倒的な力の前では、つまり、ただの“無個性”だもの。」

腕を掴んでいる脳無のもう片方の腕がイレイザーヘッドの左腕へと伸ばされた。

「っ!!」

瞬間、脳無の右腕の指が不自然に曲がりレーザーヘッドの腕から離れる。

一瞬腕が離れた間にレーザーヘッドの体は引つ張られ脳無から離される。

引つ張られたレーザーヘッドを受け止めたのは彼のよく知る一人の少女だった。レーザーヘッドは驚き目を見開いた。

「おまえ・・・なんで来た!？」

少女、石弦はその問いに緩く笑って答えた。

「ピンチに現れてこそそのヒーローですよ。」

そう言うとき弦は打って変わって強く、それでいて冷たい瞳で敵を睨み付けた。

9. 理屈じゃない

私、石弦にとって相澤消太は、緑谷出久にとってのオールマイトと同義である。

13号が言っていた様にこの超人社会は個性の使用を資格制にし厳しく規制している。

数ある理由の中の1つにそれはいきすぎた力を得てしまった事で呼び起こされた人の残忍な感情から起こる犯罪を防ぐためだという理由がある。

それ故に人を救うヒーローという職業ですら資格とされている。

そんな社会において私という存在は異端もいいところである。

資格を持っていないのにヒーローの様に個性を使い敵を捕まえてしまった。

それも1度や2度ではなくもう両手の指では足りない程に私は敵を捕まえたり人を助けたりしてしまった。それも全てで成功という結果を残してしまっているのだ。

私という異端を面白がったメディアにより私は取り上げられ決して少なくない支持を得てしまった。

しかし当然私の存在を良く思わない人達はいた。

私は天狗になっていた。

正義の味方の様に敵を倒し、人を助けて賞賛されて調子に乗っていたのだ。

ヒーローの真似事をしていいること事態が無資格の違法な個性の使用という犯罪に他ならない事に気づいていなかった。メディアが取り上げ支持を得てしまいさらに未成年だったことも有り違法者として裁けなかったのだ。

自分の名前があるサイトを見つけて調子に乗っていた私は嬉々としてサイトを開いた。そのサイトが私を批判しているサイトだとは知らずに。

私はネットで叩かれた。

私は愕然とした。

自分が犯罪を犯していた事に。私は正しいことをしている自分に酔っていたんだと気づかされた。私はそれ以上見ていられず電源を切りベッドで布団にくるまった。

そして自己嫌悪した。なんて自分は気持ちの悪い存在なんだろう。調子にのつてヒーロー気取りなんかして本当に馬鹿でしかない。応援してくれる両親に申し訳がない。そんな風にぐるぐると思考し明け方を迎えた。

日課のランニングを初めてサボった。

自己嫌悪しつつも学校にいった。

放課後に道場も行かず公園でベンチに座っていた。

「弦じゃないか。こんな所で何してる。」

そこに現れたのが相澤さんだった。

いつもの猫背で少し眉を寄せ訝しげに私を見ていた。相澤さんは私の顔を見てから私の横に座った。ただ黙って座る相澤さんに私は誰かに聞いて欲しかったのか自然と話していた。相澤さんは黙って聞いていてくれた。

話し終えた私に相澤さんがかけた言葉は一言だった。

「それでお前はもうどうしたいんだ？」

その言葉に私は言葉に詰まった。自分みたいな奴がヒーローになれる訳がないとも思う。なら諦める事を選択するべきだ。だけど私は諦めるの一言が言えなかった。理由は応援してくれる両親に悪いからとかそういう理由ではなくて、もっと自分勝手な理由だった。

「私は、諦めたく．．．ない！」

ただ私が諦めたくないから。ヒーローになりたいから。そんな私の為の理由だった。そんな私に相澤さんは軽く言った。

「なら、なればいい。」

「は？」

呆ける私になおも相澤さんは言葉が続けた。

「どうせお前の将来の事だお前が決めればいい。ここで諦めるだとか言っても俺は止めない。」

だがこれだけ言っとくが、お前が捕まつてねえのはお前がやったことが市民にとって正しい事だったからだ。ヒーローが間に合わないその状況でお前が動いた事で確実に救われた人が存在した。どこもおかしいことじゃない。むしろ褒められて然るべき事だ。」

相澤さんはため息をついてから私を見て不機嫌そうに続けた。

「大体お前は気にしすぎなんだ。ヒーローは良くも悪くも注目される存在だ。いちいちネットの書き込みで落ち込んでたらヒーローなんてやつてられねえよ。それにお前はそんな書き込み一つで困ってる奴のこと見捨てられるのか？」

「そんな事できません!!・・・あ。」

思わず反論してしまい自分に驚く。相澤さんはそんな私に口元を緩めて言った。「だろうな。」

そして相澤さんはベンチから立ち上がり目線のみ私に向けた。

「弦、お前にはヒーローの資質がある。少なくとも俺はそう思ってる。」

そう言つて去つて行つた相澤さんの背を見つめる私からは迷いが消えていた。

私は認めて欲しかったんだ。私のやっていた事が間違いではなかったのだと。人の為になつていたのだと。諦める必要などないのだと。相澤さんは当然の様に私に欲しい言葉をくれた。

ヒーローになりたいならなれば良いと肯定してくれた。資質があるとまで言つてくれた。嬉しかった。

相澤さんのこの時の言葉で私は今まで以上にヒーローになりたいという気持ちが強くなった。

ネットで私の活躍も見るのをやめた。まだ批判が怖いというのもあつたが一番は慢心しないため。

この出来事がきっかけで私は緑谷出久がオールマイトに憧れる様に、イレイザーヘッドに強く憧れを抱くようになったのだ。

私、石弦にとって相澤さんは憧れと同時に両親と同じ程に敬愛する存在なのだ。

そんな相澤さんの血だらけでぐしゃぐしゃになった右腕を見て眉間に皺が寄る。こうなると知っていたのに間に合わなかった事に自分を責める。

「弦、おまえの敵う相手じゃねえ！おまえなら分かるだろ・・・逃げろ!!」

自分もぼろぼろなのに人の心配をする相澤さんに格好いいと思わされる。ああ、この人はやっぱりヒーローなんだ・・・。

「敵う相手じゃない？そんなの気づいてますよ。それにこの場面で私が参戦しても勝てる算段もないし合理的じゃないのも分かっています。」

相手は対平和の象徴に改造された存在、敵うわけがない。

分かっている。それでも私は逃げない。

逃げるなんて選択肢は存在すら許さない。

「なら・・・!」

必死に言いつのろうとする相澤さんに私は軽く笑って答える。

「すいません相澤さん。」

理屈じゃないんです。」

「バカ野郎・・・!!」

あなたが傷つけられて私が黙っている事なんて出来ないんです。
例えばそれをあなたが望んでいなくても。

まだまだ弱い私だけど、あなたを必ず守るから・・・。

私は一步踏み出して「脳無」と「死柄木弔」を睨み付けた。

頭は不思議と冷静で自暴自棄に突っ込むなんて考えはもちろんない。

勝つ事が目的ではない、飯田くんが助けを呼びに行き黒霧が現れるまで時間を稼げば良い。

ここで私が助けの来る前にやられてしまえば結局相澤さんも出久くん達も殺される。焦っては、いけない……。

「なに君いきなり現れて助け出したりしてかっこいいなあ……かっこいいね……イレイザーヘッドに惚れてんの？どうでもいいんだけどね……。君子どもじゃん……。そんなヒーローみたいな事してるとつい殺しちやいそうだなあ……。まあ殺せばいつかああ……。」

死柄木弔の言葉と同時に走り出し糸を伸ばして一瞬で脳無の後ろへ移動し背後から後頭部を思い切り蹴る。

「っ……!!」

直感でその場からすぐ飛び退く。

私が今いた位置に避けた一瞬後に脳無の拳がありクレーターが出来ていてゾツとする。避けてなければやられていた・・・!!

私は今の腕の動きがほんの一瞬見えていて気づけた。

おそらく、いや絶対的に敵は本気を出してはいない。時間稼ぎを目的としている私からすれば好都合。死柄木甲も特に何もせず傍観しているのもありがたい。相手からの攻撃に移らせないようにかくヒット&アウェイで攻めるしかない。

全神経を脳無に集中させる。

糸を伸ばすと同時に踏み込む。

「ふっ……っ！」

頭上に移動し蹴り掛かるが脳無の肩が動く。即座に糸で背後に移動ししやがみ込み足払いをかける。しかし蹴りの衝撃は脳無の足に吸収され無意味となる。瞬時に左へ飛び脳無の拳を避ける。

脳無の動きが床を殴ったままの体勢で止まる。

足払いをかける時に着いた手から糸を床に貼り付けておいた。私のいた場所を必ず攻撃するのでそこに罠を仕掛けたのだ。案の定引つかかってくれた。いつまで糸が持

つか分からないが、この好機を逃すわけにはいかない。

即座に距離を詰め脳無の空いている左手を胴体ごと糸で巻き付けて固定する。また動こうとして動きが止まる。今度は両足を囲む様に巻き付け・・・

「っ!!」

咄嗟に悪寒がして避けると今いた位置に死柄木弔の手があった。

脳無に集中するあまり死柄木弔が頭から消えていた。今避けられたのは本当に運が良かったとしか言えない。背中に冷や汗が流れた。

死柄木弔は脳無に巻き付けられた糸に触れた。

ボロ・・・ボロボロ・・・

糸は崩れて落ちた。これでまた振り出しに戻った。それだけではなく傍観していた死柄木弔も参戦するかもしれない。状況は最悪だ。

死柄木弔が私に顔を向ける。

「君なかなかやるねえ・・・脳無の攻撃を先読みしてる。最近の子どもはすごいなあ。でもそろそろ・・・飽きたんだよね。だからさあ・・・

脳無、殺せ。」

「!!」

それは前世で似たシーンを見たことがあったからこそできた1度限定の奇跡に他ならない。

漫画でもオールマイイト以外目視すら出来ていなかった超スピード。

死柄木弔の言葉が終わると同時に私はただがむしやらに横に飛んだ。

この判断が正に私の命運を分けたと言って相違なかった。

それでも完全に避けきる事は出来ず口から血を吐く。

脳無の拳が脇腹を掠めた。

ただそれだけの事で血を吐く程のダメージをもらった。真面目に化け物だ。今の攻撃がもう一度来たら今度は確実に食らう。動き出すより早く避けなければ避けられないのだ。今の万全の状態ですら掠められ、尚且つ肋骨も数本折れ内蔵にもダメージを食らい万全ではなくなった。

詰んだ。

状況的に死ぬのだと理解したが後悔はしていなかった。

原作では相澤さんは両腕と顔面に骨折を負いさらに眼窩低骨がこなごなになり目に

後遺症が残る可能性があると言われていた。私一人の存在でその未来を変えられた。目への被害を防げた。

それだけで私は笑えた。

脳無がゆつくりと体をこちらに向ける。

ああ、ここまでか……。

ズズズ……ズズ……

「死柄木 弔。」

「黒霧、13号はやったのか?」

死柄木弔の意識が黒霧に逸れてそのせいか脳無の動きも止まる。

助……かつ、た……??

気が抜けそうになるが堪える。まだ敵は目の前にいるのだ。今はズキズキと痛むダメージに感謝した。

私の事は眼中から外れた様で死柄木弔と黒霧は会話を進めていく。

「今回はゲームオーバーだ。帰ろっか。」

私はその言葉を聞き警戒する。まだ！まだ安心するなっ……！！

「けどもその前に平和の象徴としての矜持を少しでも……

へし折って帰ろう！」

ただ一心に糸を伸ばした。

「っは、はあはあ……！！」

隣にいる梅雨ちゃんの無事を確認する。今のダメージでは引き寄せるのは1人が限界だった。

「本当にかっこいいぜ……君。でもまだ甘いね。」

また糸を伸ばすが届かない。出久くん達がやられてしまう……！！

しかし死柄木弔の個性は発動せず出久くんが咄嗟に攻撃に移る。

「脳無」

S M O S S H !!!

「え．．．？」

出久くんのS M O S S Hで一切ダメージを受けていない脳無に驚き出久くんの動きが止まる。

「いい動きするなあ．．．。スマッシュユって．．．オールマイトのフォロワーかい？
まあいいや君．．．」

バアンツ!!

その時、ドアを壊して現れたのは正に希望。

「もう大丈夫。

私が、来た!!!」

平和の象徴だった。

10. ごめんなさいありがとう

現れたオールマイト（希望）にみんなが喜ぶ中私はこの隙に出久くと峰田くんを糸で引き寄せる。

無理をして2人同時に引つ張った為凄まじく傷が痛んだが堪える。

「あ、石さんありがとう！」

「石く！マジ助かったぜ!!ありがとうな!!」

「どういたしまして。でもまだ、終わってないよ。」

2人のお礼に軽く答えて死柄木弔達をとにかく見つめる。

ここに来て何か起きないなんて保証がないからだ。

敵をきつく睨み付けネクタイを千切り取るオールマイトは笑っていなかった。

一瞬動いたかと思えば敵は倒されオールマイトが目の前にいた。

速い！目で追うなんて不可能だ。オールマイトの速さに私が脳無の攻撃を避けれた

のは本当に幸運だったのだと改めて思う。

オールマイトは私達を庇うように背中を向ける。

その背中には平和の象徴故か不思議な安心感があつた。

「皆入り口へ。相澤くんも私に任せて、早く!!」

「・・・分かりました。お願いします。行くぞ。」

よろりと立ち上がる相澤さんはどこか悔やんでいる様な雰囲気をしていた。

とてもオールマイトのことが心配そうな出久くんは大丈夫の一言を聞いて不安そうだが相澤さんに肩を貸して入り口へと歩き出す。背後からの戦闘音に足が止まりそうになるが相澤さんが声をかけてそれを防ぐ。

移動中も峰田くんが応援していたり梅雨ちゃんが何か話していたが私はそれどころではなかった。

脳無との戦闘時に負った脇腹の傷の痛みが増していてさらに呼吸も苦しくなってきた。

ていた。

折れた肋骨が肺に刺さったのだろうかと考え、頭にも大分もやが掛かってきて既に周囲の音が聞こえない。

まだ・・・倒れ・・・る、な!!

ここで倒れたら足手まといにしかならないと思い、気合いで足を動かした。

ふとみんなが足を止めていた事に気づいて振り返ると出久くんが死柄杓木吊へと飛びかかっていた。

痛みなんて痛いを通り越してなくなっていた。

思考は頭にもやが掛かっていてまるでぼうつとテレビを見ている様な状態で何も考えてなんかいなかった。

あえて言うならその時の行動は無意識。

ただ気づいたら動いていた。

突っ込んだ出久くんの足に糸を貼り付けて引つ張った。

最後に出久くんが死柄木弔の手から逃れたのを最後に私は意識を失った。

n o s i d e

死柄木弔などの敵は去り相澤、13号、緑谷、石の怪我人は速やかに搬送された。

警察が残された敵を連行し生徒の数を確認する。全員いるのを確認し終え移動する
ように声をかける。

「刑事さん、弦ちゃんは・・・」

今回の事件での怪我人の1人石弦の事を友人の蛙吹梅雨が心配そうに訪ねる。

『肋骨3本骨折、折れた肋骨が肺に傷をつけ肺の一部分に血がたまつていれ血胸になつています。内臓にもいくつかダメージはありましたがこちらはそれほど酷い損傷はな
く後遺症が残る心配もありません。』

「だそうだ・・・。」

「ケロ・・・。」

1Aの面々は石の容態を聞き後遺症が残らない事にホツとする者、自分のせいではと自責の念を感じる者、止められなかったと悔やむ者などそれぞれだった。

翌日は臨時休校となり生徒達は思いを胸にそれぞれの帰路に着いた。

n o s i d e e n d

意識が戻ると知らない天井だった。

口にはドラマとかで見る呼吸器がついていて自分が病院にいることを自覚した。

そうか、私は気絶したんだ……。みんなは、相澤さんは無事なんだろうか……。？
ぼんやりとする意識の中で首を横に向けると扉が開いていて驚いたように目を見開く人使が立っていた。

「ひ……とし……。」

名前を呼ぶと驚いていた人使の表情が歪む。どこか苦しそうで悲しそうな表情で目を逸らす人使に手を伸ばそうとするけど私の意思に反して手は動かず指先がびくりと動いただけだった。

病室を出て行く人使の背中を私は見送る事しか出来なかった。

人使はナースさんと呼んできてくれた。医者もやってきて診察された。気絶してる間に目をまたいでいたらしく事件があったから今日は臨時休校だとも聞いた。処置は終わっているそうで今日にでも退院していいそうだ。1週間もすれば完治すると聞いてホッとした。体育祭に参加出来ないという事態にはならなくて良かった。両親には人使が連絡してくれた様ですぐに迎えに来てくれるらしく病室で待つことになった。人使も私も黙り沈黙が流れた。

正直とても気まずい。人使の雰囲気なんか怖い。眉間にすごく皺が寄っている。めっちゃ気まずいが状況を打破すべく頭を回転させる。

- ①指で眉間をぐりぐりして物理的に皺をなくす
- ②とにかく気の向くままに口を開く
- ③理由を尋ねる
- ④寝る

ひとまず④はないね。この状況で寝れる程私のメンタルは強くはないのだよ！内心で心の眼鏡をくいと上げる。え？リアルではかけてないのかって？両目とも2.0ですがなにか？②は重大事必須だね☆確実に部屋の空気が凍るを通り越してなくなる

わー。となると①か③だけでもまあここは無難に①だよね!! 決定!

「弦・・・。」

!!!

タイミング良く名前を呼ばれて驚く。バレた!? おそろおそろ人使を見るとうつむいてゆつくりと私の右手を両手で握った。どどど、どうしよう!? やっぱ気づいてるよね!? これは暗にやらせねえよって事なんでしょうか!? 割とソフトに握ってるから痛くもないしこれなら逃れるのも容易だけどきつと人使のことだから罨だね! とかふざけたことを考えてると握っている人使の手の力が強くなって、そこでようやく私は人使の手が震えていることに気がついた。

「人使・・・?」

名前を呼ぶとさらに手の力が強まって少し痛いくらいに握られた。抗議しようとしたときに人使が先に口を開いた。

「良かった・・・目を、覚まして・・・! 寝てる弦が、死んでるみたいで・・・っもう、

起きないんじゃないかと思つたつ！本当に、良かった．．！！
「!!」

絞り出す様にとても苦しげに話す人使の姿に本当に心配していたのだと知り胸が締め付けられた。

痛いくらいに握られてる手の抗議もすることが出来る訳なかった。人使は普段からきつい口調だったりするが根はヒーローを志すだけにとても思いやりがあつて優しい。親友が怪我をして病院に運ばれて約1日死んだように寝ていたら人使が心配しない筈がない。気づかなかつた自分の馬鹿さが嫌になる。

「馬鹿弦っ！心配させんなよ．．！！」

強がるようにそう言つた人使の目からは涙がこぼれていた。

「ごめん。本当にごめん．．！！」

自然と私は謝っていた。苦しそうに震える人使の姿にどれだけ心配をかけたかを強く理解する。心配をかけて本当に本当に悪いと思つた。だからこそ私は人使に言う。言わなければいけない。そう思つた。

握られる人使の手に左手でそつと触れる。

「人使。」

人使が顔を上げて涙に濡れた目で私を見る。私は真つ直ぐと人使の目を見た。「心配かけてごめん。今回の事で人使にすごく心配かけて本当に悪いと思ってる。

・・・でも、でも私はこれからも一杯無茶すると、思う・・・ていうかする！だから私はヒーローになるから！これから一杯無茶も怪我もするから！一杯一杯心配かける事になる！だから！えと、その・・・だから、だから！心配かけるからごめんなさい！！」

感情が高ぶって涙が出てきた。言葉も支離滅裂になってしまった。それでもそんな私の言葉を人使は聞いてくれた。笑ったりしないで真つ直ぐに聞いてくれた。

人使はぐつと唇を噛み締めて片手を話して涙を拭った。そして笑って言った。

「馬鹿。謝るくらいなら、そこは怪我もしないくらいすごいヒーローになるって言えよ。」

そんな人使の言葉に私も涙を拭って言った。

「オールマイトですら怪我したのに無茶ぶりじゃん・・・。」

思わず出たのは肯定ではなく否定。嘘でも怪我したヒーローを思い出しそうだねとは言えなかった。胸がまた苦しくなつて目線が手に下がった。この場面で肯定出来ない私の情けなさに嫌になる。

「オールマイトよりすごいヒーローになればいいだけだろ。」

事も無げに答える人使を思わず驚き凝視した。オールマイトよりすごいヒーローなんて……。そんな驚き黙った私に人使は挑戦的な目で言った。

「俺はなるつもりだけど弦はならないの？」

その言葉に私の心に火がついた。同じ夢を追う親友にここまで言われて、無理なんて言うわけがなかった。

挑戦的な目で見ながら挑発するように笑って言う人使の姿に自然と苦しかった胸の痛みもなくなりむしろ不思議なくらいに心は高ぶり私は笑っていた。

「なるよ！N O O H I E R O O に!!」

人使は強くそれでいて嬉しそうに笑って拳を私に向けた。

「なら競争だ！」

「うん！負けないから!!」

お互いに笑って拳を突き合わせた。

その後、両親が迎えに来て両親に心配かけたことを謝った。それから怪我もしないくらいすごいN O Iヒーローになると宣言した。両親は涙で潤んだ瞳を細めて笑って優しく抱きしめてくれた。2人はとても温かくて本当に2人が私の両親であることに心から感謝した。

車での帰り中に人使と後部座席で座っている時に私は窓の外の景色を見ながらぼつりと言った。

「人使、今更だけど心配してくれて、嬉しかった・・・ありがとう。」

「あっそ・・・。」

すっかり調子を取り戻しそつげなく答えた人使も反対の窓から景色を見ていた。

お互いの頬が赤いのに気づく事はなかった。

11. 途中主人公空気すぎr（不思議な力）はっ！

教室に入るとみんなに囲まれた。

「弦ちゃん怪我はもう治ったのかしら？」

「後約1週間もすれば完治って言われた。でも処置も終わってるし見ての通り元気だよ！」

「弦〜！良かった〜!!」

梅雨ちゃん言葉に元氣アピールしながら返すと涙目の三奈ちゃんに抱きしめられた。こんなに心配してくれてすごく嬉しくて心が温かくなる。

みんなも口々に労ってくれてる時に出久くんが少しうつむきがちにこちらを窺って首を傾げる。

出久くんは思い切った様に顔を上げて口を開いた。

「石さん。あの時・・・僕の事助けたから傷、悪化したんだよね？僕が考え無しに突っ込んだから石さんに無理させちゃって・・・。本当にごめん!!」

がぼつと頭を下げる出久くんにもみんなも驚いた。そうか彼は人一倍優しいから自分を責めてしまうのか……。でもあれは無意識での行動だし私は出久くんを助けた？というか引つ張つた事を後悔していない。

だからぶつちやけ謝られても困る。というわけでここははつきりと言わせて貰おう。

「私はさヒーローになりたくて雄英（ごご）に来たんだよね。」

「え？う、うん？」

私の言葉に出久くんが困惑したような表情になるが気にせず続ける。

「ヒーロー志望としてあの場面で行動するのって自然なことだと思うんだ。確かに結果的に私の怪我は悪化したけどそれは私の自業自得だし出久くんのせいじゃないよ。」

「で、でも……。」

言い返そうとする出久くんの言葉を私は遮る。

「それに私としては謝られるよりもつと言われたい言葉があるんだけどな？」

ニツと笑つて出久くんに言うとお出久くんはハツとしてから緩く笑つた。

「うん……ありがとう。」

「どういたしまして。」

なんとなく出久くんと仲良くなれたと思いました。やったね☆

その後も心配して声をかけてくれるみんなの優しさにジーンとした。

なんだかんだ話してたらHRになり席に座った。

朝から飯田くんの天然ボケと瀬呂くんの素晴らしいツツコミに腹筋を攻撃されたが耐えきった私はまた一步トップヒーローに近づけた気がしたね、うん。

「お早う。」

「相澤先生復帰早えええ!!」

原作と違ってぐるぐるに包帯が巻かれているのは右手だけで顔には絆創膏が一杯貼ってあるが無事な様子にホツとする。みんなが相澤さんの無事な姿にホツとする。本当にみんないい奴等だなあとしみじみ思う。

「俺の安否はどうでもいい。何より戦いは終わってねえ。」

「!?!」

相澤さんの紛らわしい言葉にみんながざわざわする。ざわざわって漫画だとめっちゃモブさん方が仕事するところだよ。そこで中に妙に説明口調で詳しい奴がいるんだけど奴等は何者なんだろう？あ、モブか！またふざけた事を考えてたら相澤さんの体育祭宣言を聞き逃した。ちくせう何故だ・・・！

みんなは敵に襲撃されたのに行うことに動揺した。それで大丈夫なのかという問い

に相澤さんは冷静に返す。冷静な相澤さん相変わらずめっちゃ格好いい。

「ウチの体育祭は日本のビッグイベントの一つ!!」

かつてはオリンピックがスポーツの祭典と呼ばれ全国が熱狂した。今は知つての通り規模も人口も縮小し形骸化した。

そして日本に於いて今「かつてのオリンピック」に代わるのが・・・

雄英体育祭だ!!」

オリンピックに代わる体育祭とかすごすぎだろ。前世でオリンピックを全部じやないけど見たた私からすると漫画で読んでた時よりとんでもない事がよく分かる。マジパネエ。

「当然名のあるヒーロー事務所に入った方が経験値も話題性も高くなる。

時間は有限。プロに見込まれればその場で将来が拓けるわけだ。

年に一回・・・計三回だけのチャンス。ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ
!」

相澤さんの言葉にみんな気合いが入った表情になった。

―昼休み―

みんなノリノリに体育祭のことを話している。私は梅雨ちゃんと三奈ちゃんとお昼を食べるべく財布を持つ。梅雨ちゃんの冷静なツツコミが面白くて少し吹き出したがお茶子ちゃんのNotもうらかなアレな表情のお陰？で気づかれなかった。セーフ。うららかじゃないお茶子ちゃんの表情はリアルだとマジでアレな感じだった。「どうした？全然うららかじゃないよ麗日。」

「生……」スパアン！バシイ！

ひとまず峠田をはたいた事に関しては後悔も反省もしなかった。

「皆！！私！！頑張る！」

お茶子ちゃんがうららかに戻ることを切に願っておこう、うん。

ランチラツシユの美味しい唐揚げ定食味わって食べた。マジランチラツシユパネエ。

ー放課後ー

なんか今日は1日が早く感じるけどなんでd（不思議な力）……はっ！！私は一体……??何か考えていた気がするけど気のせいかな？ま、とにかく放課後だし帰らないと。

ザワザワザワザワザワザワザワザワザワ．．．e t c.

「何ごとだあ!!?」

お茶子ちゃん本当それな。思わずエトセトする程にザワザワしてるわ。

「出れねーじゃん！何しに来たんだよ。」

「敵情視察だろザコ。」

w w かつちゃんマジ淀みねえw w あれがニュートラルとかウケるw w 峰田の表情もワロタw w

「意味ねエからどけモブ共。」

「知らない人の事とりあえずモブって言うのやめなよ!!」

飯田くんごもつともw

かつちゃんが淀みなさすぎて笑いがやめられない止まらない．．．!!

「迎えついでにどんなもんかと見に来たがずいぶん偉そうだなあ。」

あ、教室まで来るとは珍しい。

「ヒーロー科に在籍する奴は皆こんななのかい？」

「ああ!？」

必死に否定する出久くと飯田くんのM Iペアが可愛すぎて禿げそう↑

「こういうの見ちゃうとちよつと幻滅するなあ。」

普通科とか他の科ってヒーロー科落ちたから入ったって奴けっこういういるんだ知ってた?」

「?」

いやに口調が優しいのが気味悪い。私は今うわあつて表情してるけどこれは人使が悪いいね。後でアイス奢らせよう、そうしよう。

「体育祭のリザルトによつちやヒーロー科編入も検討してくれるんだって。その逆もまた然りらしいよ・・・」

敵情視察? 少なくとも普通科(おれ)は、調子のとつとつと足元ゴツソリ掬っちゃうぞつつー宣戦布告しに来たつもり。」

空気が固まったのを見てはああくため息をつきつつ前に出て行って人使の頭を軽くはたく。

「ていやつ。」

「つて、弦なにすんだよ。」

不機嫌そうにこつちを見る人使を私も不機嫌そうに見返す。

「なにすんだをブーメランしとくわアホ。お前のせいで空気が固まっちゃったでしょーがよ。」

「別にいいだろ。」

「別に人使が宣戦布告しようが愛を叫ぼうがシャウトしようが構わんがそれは私がいなるところでならのお話なのだよヒトソンくん。」

「分かったけどその口調と呼び方やめろ、きもい。」

「てめえ。」

普通にむかつてさっきとはまた別に空気が固まる。ひとまずここは私が大人になつてやろうと軽く深呼吸して落ち着く。

「ここは休戦して帰ろうと思うけどどうだい？」

「俺は帰る気あったけど止めたの弦じゃん。それに休戦とか勝手にキレてんのも弦だろ。」

人使がケツと効果音がつきそうに言った言葉に、ぷつちーんと何かがキレた音がしたような気がした。

「よろしいならば戦争「ふっ、二人は知り合いなのか!?!」・・・はっ!」

一触即発な空気になったが出久くんの質問でハツとした。危ない危ないキレる所だった。

私はもう一度深呼吸して今度こそ落ち着かせて出久くんの方を向く。

「ああ、ごめんね。こいつは心操人使。中学一緒に私の親友なんだ。」

「えええー!!」

出久くんや他のみんなにも驚かれた。まあたつた今一触即発な空気になった奴等が親友とか驚くよね普通。私は苦笑いしつつこれ以上この教室の空気に耐えられなくなって人使を引つ張つて校舎を出た。ちなみに手を握るとかのイベントはない。手首を引つ張つたのだ。そこ重要。

未だに無言の人使にまた私はため息が出る。

こやつ不機嫌だな。宣戦布告の時はそうでもなかったのに意味が分からん。

「で、なして不機嫌なん?」

「別に不機嫌じゃねーし。」

ガキかこいつ。こういうときの人使は話させようとしても話さないから放置するのが正解だ。ここテストに出るよ!

暫くの沈黙の後に人使が口を開いた。

「・・・あいつと仲いいのかよ。」

「フーイズあいつ?」

「・・・あのモブとか言つてた奴。」

かつちゃん？

「爆豪くん？別に仲良くないよ、全然話した事もないしね。なして？」

「・・・別に。」

「そればかりだな！」

思わず突っ込んだ私に罪はない。人使はなぜか顔を逸らしてずんずん進んで行った。なんかむかついたので後ろから飛びかかってやった。

「うわっ!!おまつ弦降りろ！」

「うるせー！私に精神的迷惑をかけたお詫びだ！このまま道場まで進め人使号!!」

「なんだよそれ！つたく落ちてても知らねーからな。」

「おうともよ。」

「・・・まったく人の気も知らないで。」

「ん？なんか言つた？」

「なんも言つてねーよ。」

なんか言つた気がするが人使の機嫌も直つた様なので良しとしよう。

その後帰り道で会つた応援してくれる人に冷やかされて速攻降りたのはまた別の話だといいな↑

それから2週間はあっという間に過ぎて傷も完治した。

そして迎えた

雄英体育祭 本番当日!!!

12. 雄英体育祭開幕

いつも通り家を出て人使と登校した。

二人とも無言だったけど不思議と気まずさはなかった。

学校に着いてクラスの控え室で入場を待つ。

轟くんが出久くんに宣戦布告していたがそれすら今は気にならなかった。

約束したんだ。

「勝つ……！」

「1年ステージ生徒の入場だ!!」

ザンツ!

「雄英高校体育祭!! ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!
どうせてめーらアレだろこいつらだろ!!?
敵の襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!」

ヒーロー科!! 1年!!!

A組だろおお!!?

人多!!!

え?なに!? みんな暇なの?? 学校の体育祭をオリンピックク代わりにしちゃうくらいに暇なの?? ねえ!? おかしくない!? 多すぎるだろ人!!

え? 控え室での気合はどうしたって?? 控え室に置いてきちゃいましたかなにか???

いやいやいや知ってるだろ? 俺目立つの大嫌いなんだよお!!

いやあ! 私を見ないでえ!!

「爆豪もだけど石も落ちついてんな。さすがだぜ・・・!」

いやいやいや! これは表情が凍り付いてるだけだからあ!! さすがとか切島くんの中

での私は一体どういう人物なのか気になるよ！いや知りたくもないけどさ！

「選手宣誓!!」

18禁ヒーローミッドナイトの声で正気に戻る。決して鞭の音に反応した訳ではない。本当さ。

選手代表でかつちゃんが壇上上がる。ポケットに手入れたまんまで見るからに柄が悪い。ある意味かつちゃんらしい。

「せんせー、俺が一位になる。」

「絶対やると思った!!」

切島くんのキレの良いツツコミを継起にブーイングが起こる。

このブーイングの中で幼なじみの出久くと私のみ、この宣誓がかつちゃんの自信からではないのだとわかっていた。

改めて気合が入った。

「さーてそれじゃあ早速第一種目行きましょう。」

「雄英って何でも早速だね。」

まったくです。

「いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲むわ（ティアドリンク）!!」

ティアドリンク……。

「さて運命の第一種目!!」

今年は……コレ!!!」

障害物競走

「計1ークラスでの総当たりレースよ! コースはこのスタジアムの外周約4km!」

4kmならまあそこそこか。てか総当たりとか振り落とす気満々ですよね分かります。

「我が校は自由さが売り文句! ウフフフ……コースさえ守れば何をしたらって構わないわ!」

さあさあ位置につきまくりなさい……」

適当に位置につきまくる。

息を吐く。

「スターート!!」

スタートゲートに糸を付けてゲートに詰まっている他の人の頭上を飛ぶ。

「つてえー!!何だ凍った!!動けん!!」

轟くんが個性で地面を凍らせて足止めをしているが私には関係ない。

個性を知ってるIAの面々も避けていた。

「くらえオイラの必殺・・・GRAPE「WHAM!!」」

吹っ飛ばされる峰田に内心で手を合わせておいた。ほどほどに強く生きろ。

『さあいきなり障害物だ!!』

まずは手始め・・・第一関門ロボ・インフェルノ!!』

インフェルノかつこいい・・・はっ!プレゼント・マイクの素敵ネーミングにときめいている場合じゃない!

轟くんが凍らせたロボットに糸を付けてロボットが倒れるのと逆に頭上を抜ける。

『1-A轟!!攻略と妨害を一度に!!こいつあシヴィー!!』

さらに1-A石!!冷静に倒れる敵を利用して頭上を抜けた!!こいつあクール!!!』

そのまま走って轟くんに並ぶ。

第二関門のザ・フォールだったかな?に着いて私は笑う。

「先行くよ。」

轟くんを置き去り糸で一氣に宙を舞う。

こういったフィールドは私の得意とするところ。ここで一氣にアドヴァンテージを稼がせて貰う。

『おおっと！第二関門ザ・フォールで石が宙を舞ってるぜ!! 楽しそお!! 一氣に先頭に躍り出たあ!!』

出来る限り早く第二関門を突破する。

走りながらちらりと後ろを確認すると轟くんはかなり距離を離せていた。よし!

次の場所は開けた場所で遮蔽物などは一つもなかった。

『先頭が一足抜けて下はダンゴ状態! 上位何名が通過するかは公表してねえから安心してずにつき進め!!』

そして早くも最終関門!!

かくしてその実態は・・・一面地雷原!! 怒りのアフガンだ!!』

平地の地雷原に内心うわあと思いつつ慎重に走る。

後ろからの聞こえる音に焦りそうになるのを落ち着かせつつ地面に意識を集中させる。

なんとか3分の2くらいまで走る。急げ急げ!!

「追いついたぜ。」

「待ちやがれ粘着女!!」

いやかつちゃんその呼び方私が粘着質な女みたいじゃんやめて!!確かに粘着質(物理)だけでもさ!!

てか追いつかれた!やべえ!この距離だとギリギリだけど四の五の言ってられない!!

右手で糸を最大まで伸ばす。

「らああ!!」

本当にギリギリ地雷原の終わりの壁に糸を付ける。

後ろからの爆発音を尻目に糸に引つ張られるまま地雷原を翔け抜ける。

壁に勢いのままに足をつき瞬時に左手でゲートに糸を伸ばし飛ぶ。

糸に引つ張られる勢いのままにゲートの光の中へと突っ込む。

『序盤から終始冷静に障害物を対処し他の野郎どもを置き去り今一番にスタジアムに

還ってきたのは、

その女・・・石弦だあ!!』

大きな歓声とプレゼント・マイクの声に1位の実感が遅れてやってくる。

「よしっ!」

思わずガッツポーズをしていた。ただ単純に嬉しかった。

その後すぐに久くん達がゲートからやってきた。

出てくる面々を見ながら人使が出てきたの見つけて口角が上がった。目が合うと人使もニツと笑い返してきた。

ミッドナイトの声に結果が映り一気に羞恥心がやってくる。

ううわそうじゃんめちやくちや目立っちゃったじゃん!うわあうわあ!!見られてるう!み、見るんじゃない!だってほら私って集中すると周りの事とか気にならなくなっちゃうからさ?でもだからって平気な訳じゃないんだよ!!うわあ調子に乗っちゃったよ!乗っちゃったよ!そういえばさつき第二関門で轟くんに行行くね(キ

ラツ)みたいな事言っちゃった!うわ絶対調子乗ってるとか思われてそう!!やっちゃったああ!!でも相澤さんもお父さん達も見てるし私の個性とも相性のいい障害物競走で頑張らずどこで頑張るって話じゃん!え?知らねえよ?この薄情者!!もういい!!次の種目も頑張る!!開き直りますがなにか!!?さあ次の種目は何だ!?

「コレよ!!!」

騎馬戦

お、おう。タイミングが良すぎてびびった。

なんか冷静になったわ……。

うん、怒鳴ってごめん……。

騎馬戦かあ。ポイント制なんだ。へえ面白いな。ハチマキ系でとるのもありだよね。うん、なかなか頑張れそうだ。問題は誰と騎馬を組むかだよ。だれか組んでくんないかな……。

ところでポイントってどう振り分けられるんだろ?

私は何ポイントなんだろか?

ん?さっきの結果にしたがって?

え？私1位だったけど？
てことはつまり？

「1位に与えられるPは1000万!!!!」

あ、詰んだわこれ。

13. 騎馬戦開幕

「上に行く者には更なる受難を、

雄英に在籍する以上何度でも聞かされるよ

これぞ、 Plus Ultra!

予選通過1位の石弦さん!!持ちP1000万!!」

めっちゃみんなに見られてる。

みんな獲物を狙う目をしてる怖すぎ助けろください。

しかし真面目にこの騎馬戦のこと忘れてたよ。1000万ポイントとか1人だけ桁がおかしいでしょうが!

「制限時間は15分。

振り当てられたPの合計が騎馬のPとなり、騎手はそのP数が表示されたハチマキを装着!終了までにハチマキを奪い合い保持Pを競うのよ。」

完全狙われるよね私。いい獲物だよね??ワタシオイシクナイヨ?

「取ったハチマキは首から上に巻くこと。とりまくればとりまくる程管理が大変になるわよ!」

そして重要なのはハチマキを取られてもまた騎馬が崩れてもアウトにはならないつてところ!」

エ、ナニソレツライ。

万が一にも崩れたら立て直す暇なくハチマキ取られるよな。

最悪踏まれそう・・・。

うわ自分で言つといて笑えねえわそれ。

「それじゃこれより15分!」

チーム決めの交渉タイムスタートよ!」

「15分!?!」

みんなが驚く中、私は急いで歩いて目的の人物を見つける。

「人使!私と騎馬組んでくれさい!」

「おい敬語じゃなくなってるぞ。」

「悪い。で、組んでくれる？組んでくれないと間違ひなく私が終了してしまうのだけども……。」

とにかく必死になって人使に頼む。

人使は首に手をかけながら何でもないように答えた。

「いいよ。つてか元々誘うつもりだったし。」

「心の友よ!!」

マジで感激した。

なんていいやつなんだ!

人使の個性は強力だし敵対したらめんどくさいとか思つてごめんな!!

「うるさい。」

「すみませんなさい。」

「組むのやめるぞ。」

「心の底からごめんなさい。」

「さて、後はどうするか……。」

「だね。」

頭を切り換えて周囲を見渡す。

轟くんは早々に原作道理のメンバーで組んでるな。他のメンツはまだ組んでいないがもたもたしてはられない。

人使は横で腕組んでぶつぶつと考えている。お前は出久くんか。

「人使、こんなのどうだろう?……ってな感じなら悪くないと思うんだけどさ。」

「悪くない手だな。よし、ならさっさとそいつらに声掛けるか。」

「せやな!ねえねえ、ちよつといい?」



「さア上げてけ鬨の声!!」

血で血を洗う英雄の合戦が今!!

狼煙を上げる!!!
!!!」

ハチマキを締めて前を見る。

「耳郎ちゃん、尾白くん、人使、

よろしく！勝つよ!!」

「「おう!!」」

「よオーし組み終わったな?!?準備がいいかなんて聞かねえぞ!!
残虐バトルロイヤルカウントダウン!!」

3
!!!

2
!!

1
…!

S
T
A
R
T
!!!
」

プレゼントマイクの始まりの合図と共に、二組の騎馬がこちらに向かって来る。

「実質その争奪戦、どゆわっ!!」

「きゃあ!!」

ずっこける二組の騎馬。私は得意気に笑う。

「そんなの百も承知の助ってね。」

向かって来る騎馬を止めるのなんて、粘着糸で先頭の騎馬の足を地面に固定するだけの簡単なお仕事だ。ちゃっかりとハチマキも頂いたので幸先の良いスタートを切れた。

「さ〜さ〜、まだ2分も経ってねえが早くも混戦混戦!!各所でハチマキの奪い合い!!」

1000万を狙わず2位〜4位狙いつても悪くねえ!!」

周囲を警戒していると一組の騎馬が突っ込んでくる。

「アハハハハ！奪い合い…?」

違うぜこれは…一方的な略奪よお!!」

粹がる峰田の声に反応してそちらを見る。

しかし、いるのは障子くん1人。

「障子くん!?!でも峰田の声が…?!その中か!?!」

「よおく分かったなあ…、つぶぎゃあ!!」

僅かに顔を覗かせた峰田のハチマキを狙ったが紙一重で避けられた。ちつ。

「あつぶねえ!!この野郎、石よくもやったな!行けえ!障子!!蛙吹!!」
君に決めたつてか?てか野郎じゃねえし。

「てか、梅雨ちゃんもいたのね。障子くん、すごいな!」

くそつ!あの中入つてみたい!今度障子くんに頼んでみようかな?

梅雨ちゃんが舌でハチマキを取ろうと狙つてくる。しかし、いると分かつていれば梅雨ちゃんの舌も普通に避けられる。

「後ろから騎馬来てるよ!」

耳郎ちゃんの声を聞いて一瞬考えてから右手で糸を伸ばす。

「人使、アシスト頼んだ!」

「尾白、耳郎。」

すぐに察してくれるとか、人使さん流石つす。今度から尊敬を込めてネオ人使さんつて呼んでやろう。

「はいよ。」「ああ。」

あらかじめ個性についての説明と軽い打ち合わせをしたお陰で2人とも人使の“声”にすぐに返事を返す。

「弦に捕まれ。」

糸に引つ張られるまま騎馬ごと横つ飛びで移動する。先頭の人使は、左手の粘着糸で

固定したので無問題だ。

「待てやコラアア!!」

飛んだ先には、そこに爆豪……って怖あ!!

「耳郎ちゃん!」

「わってる。」

耳郎ちゃんは耳たぶプラグをかつちゃんに伸ばす。かつちゃんは、かなりの勢いでこつちに単独で突っ込んで来ていたが、器用に反応して手でプラグをはたき落とす。

その一瞬の間があれば十分。

かつちゃんの死角から尾白くんが尻尾でかつちゃんを弾き飛ばす。

「ナイス、尾白くん!」

瀬呂くんのテープで回収されるかつちゃんを尻目に移動する。

「っ!!」

咄嗟に頭を体ごと伏せる。私の首元を掠めたのは黒い影。常闇くんの個性だ。

「出久くん……!」

取られたのは幸いにも葉隠ちゃんのハチマキで1000万は無事だ。

出久くんの騎馬のメンバーは、原作通り兎目ちゃん、お茶子ちゃん、常闇くん。

私達の騎馬では常闇くんの影対策は出来ないの、実は私達にとって厄介極まりない

のだ。

出久くんは当然そこに気づいている。

「本当に厄介だな……！」

自然と口角が上がっていた。

「7分経過した現在のランクを見てみよう！」

プレゼントマイクの声が響く。もう7分経ったのか。

「……あら!!ちよつと待てよコレ……！」

A組、石以外パツとしてねえ……つてか爆豪あれ……!？」

どうやらほぼ原作通りにポイントは動いている様だ。かつちゃんのハチマキが取られて、物間くんが何やら得意気に喋っているが、ぶつちやけそんなのどうでもいいのでスルーする。

「ギア残り時間半分を切ったぞ!!」

こつちはそれどころではないのだから。

「来たか。」

「そろそろ、奪^とるぞ。」

ラスボス降臨って感じですね。迫力がありすぎて困る。それでも不思議と高ぶる心。体の震えは武者震いつてか？

上がる口角をそのままに相對する轟くんを見る。もちろん轟くんだけでなく厄介な出久くん達も警戒する。

そして私達を狙う騎馬が一齐に向かってくる。

「人使。」

「足並み揃えて後退しろ。」

危なげなく後退して距離をとる。

複数の人間で揃えて後退というのは、実はなかなか難しい。それぞれが自由な状態ならともかく、特に、今回の様な即席のメンバーで、さらには騎馬として上に人を乗せて全員が繋がっている不安定な状態で、いきなりなんてほぼ合わないのは当然だ。個人の歩幅やペースは当然違うし、その時の精神的な焦りなどでも変わってくるからだ。

しかし、人使の個性ならそんな事は障害にもならず出来る。人使の個性は個人でも効果を発揮するが、今回の様に息を合わせたい時など、集団においてこそ生きる個性だと私は思っている。

無差別放電 130万V!!

両手を合わせて大きく横に広げて糸を騎馬の前面に垂らす。

私は糸の性質を粘着にしたり3種類まで変えられる。一つはただの糸、二つ目は普段から使っている粘着の性質、そして3つ目は電気を通さない絶縁体の性質だ。

今広げているのは当然、絶縁体の性質の糸だ。

他の騎馬は上鳴くんの放電で痺れ、その隙に轟くんによって足元から凍らされていった。

そしてついぞと言わんばかりに私達の周囲を囲むように張り巡らされる氷。

それでもお陰で厄介な出久くん達からは離れられた事にほつとする。

「チートだな。」

「ここままでだと寧ろ笑えてくるわー。」

人使の言葉に軽く返す。

チートとか言いながらも普段とあまり変わらない人使に安心する。頼もしい奴だな。

耳郎ちゃんと尾白くんは、少し顔が強ばっているけどヒーロー志望なだけあって闘志は十分といった様子だ。

「電撃は私が防ぐ。常に相手から距離とって左側対角線をキープして。」

「それで残り時間、防衛に徹するのかい？」

尾白くんの言葉に頭を横に振る。

「いや、それだと1000万を取られたら負ける可能性が高い。」

「つてことは当然？」

人使の口角も上がっているのが何となく分かる。耳郎ちゃんが察して、マジかと言った表情をしている。うん、なんかごめんね。

「こつちからも、奪りにいくよ！」

私は真つ直ぐ、轟くんの目を見つめた。

防衛戦なんて趣味じゃないんでね…!!

14・騎馬戦中盤 飯田の想い

轟side

どうしたもんか。

相手の騎馬の騎手、石弦を見つつ考える。

(俺達の騎馬の常に左側対角をキープしてやがる。これじゃ最短で凍らせようにも飯田が引つかかるし、上鳴の電撃も石の個性で防がれる。流石によく見てる。)

「残り時間約1分!!」

(そろそろ動かねえとな。)

そうは思いつつも打開策が浮かばず眉間に皺が寄る。プレゼント・マイクの実況を聞きながら思考する。

石side

そろそろ時間的にも轟くんも動くよね。

原作でも動いてたし。

ああ、攻めるよとかカツコつけた事言っただけど、本音はやっぱ攻めあぐねて時間切れが理想なんだよね。でも順位とか轟くんの性格とか考えると時間切れとか一番有り得ないからな。

とりあえずは、今の位置をキープしつつ向こうの出方をうかがうとしますか。

n o s i d e

膠着状態の中で、飯田天哉は迷っていた。

(今のままでは石くん達が時間切れで逃げ切ってしまう。)

チラッと自分達の騎馬の騎手の顔を見るが、冷静な性格の轟には珍しく眉間に皺を寄せている。その様子から打開策が浮かんでいない事を察する。

(決勝まで隠しておきたかったが、このままでは決勝以前に負けてしまう。)

飯田は相手の騎馬の騎手の石を強く見据えた。

飯田は石の事を同じくヒーローを志す者として尊敬し、そしてライバル視している。

飯田が石のことを初めて知ったのは小学校四年生の時のニュースからだ。

ニュースでは事件の起きたショッピングモールの監視カメラの映像が流れていた。その映像では、同じ年のそれも女の子が自分の倍はある大きさの敵に立ち向かい、見事に捕まえていた。

その姿に当時の飯田少年は強く憧れた。

あんな、大きな敵に怖がりもせずに向かかっていつて襲われそうな幼い子を助ける。敵から弱者を守るその姿は、飯田少年の憧れるヒーロー像そのものだった。

飯田少年はその同年代の子供に比べて賢い子供だった。故に、今の自分の實力ではこの石弦という少女の様に敵を捕まえる事は出来ないと理解できた。そして、理解した直後に幼い飯田少年の胸を占めたのは悔しいという感情だった。

飯田少年は代々ヒーローの家系に生まれ、幼い時から身近にあり、憧れでもあったヒーローになるべく修練を積んできた。それ故に同年代の子供の中では抜きん出た実力で、当時の飯田少年は端的に言って敵なし状態だった。

飯田少年は両親や兄など、身近に自分よりも実力が上の存在が常にいた為、それで天

狗になる事はなかったが、飯田少年の中には自然と自分は同年代の中では実力は上なのだという自負が生まれていた。

だからこそ、飯田少年にとって石弦という少女の存在は何よりも強い衝撃を与えた。

同年代の、それも女の子で自分よりも実力が上の存在。

まだ小学生の飯田少年のプライドは見事に砕けた。そして、飯田少年は自分が知っていた世界の狭さと、自分の知らない世界の広さを知った。

そして、まだ小学校四年生の飯田少年の心に強く火が灯った。

自分ではまだ勝てない存在に対して負けず嫌いの飯田少年は、素直に悔しい！と強く思い歯を食いしばった。そして今まで同年代の中では実力は上だと天狗になっていたと思い、飯田少年は自身を恥じた。

飯田少年は立ち上がり、テレビに映る石を強く睨みつけ、指をさすと声を張り上げた。

「認めよう！石くん！君は確かに僕よりも強い！！悔しいが今の僕では君には勝てない！！

しかし！勝てないのは今だけだ！

同じくヒーローを志す者として此処に宣言する！！

僕はっ！

君に！

絶対に負けないヒーローになってみせる！！」

そうしてこの宣言は、飯田少年自身の心に深く、深く刻まれたのだった。

「どうしたんだ天哉大声出して…って、お前なんでソファアの上に立ってるんだ！」

「あっ！うわ、兄さんこれは違っ！ごっごめんなさい！！」

刻まれたっいたら刻まれたのだった。

ともかく、飯田天哉にとって石弦は同年代の中で初めて知った格上の存在であり、それと同時に飯田天哉にとつての初めてのライバルという存在なのだ。

飯田はクラスで石に初めて直に会った時、本当はめちやくちや緊張していた。

「俺は私立聡明中学出身の飯田天哉だ。」

「私は市立名部中学出身の石弦。よろしく。」

たつたこれだけのやりとりですら、飯田は声が震えないように細心の注意をしようと言っていた。

「私も負ける気はないよ。」

飯田の宣言に、石がこの一言を返してくれて飯田は心底嬉しかった。石自身にライバルとして認めて貰った様な気がしたので。

しかし、だからこそというべきか、その後の授業での結果は飯田にとって不甲斐ない結果でしかなかった。

個性把握テストでは、石は2位、飯田は5位。

実技授業では同じチームではあったものの、飯田が爆豪にチームプレイをさせようとするのに対して、石は冷静に爆豪の状態からチームプレイは不可能と判断し、爆豪の独断専行すらも踏まえて作戦を立て結果、勝利を得ている。

もつと言えば、入試の結果から石は2位、飯田は7位で順位で負けていた。

飯田は自らの不甲斐なさに怒っていた。

(石くんを前に、なんたる無様な…!!)

こんな体たらくで彼女のライバルだなんて、おこがましいにも程がある!!)

飯田はまだ15歳の少年だ。

自分よりも勝っている相手に、さらには自身がライバル視している相手に明確に結果で負けていると分かり、自分の感情に振り回されるのは当然のことだった。むしろ嫉妬しないだけ上等というものだ。

しかし、いやだからこそ飯田はこの雄英体育祭に並々ならぬ思いを持って挑んでいた。

石の、彼女のライバルとして胸を張れる結果を残す。飯田は強く意気込んだ。

意気込んだはいいものの第一種目の障害物競争では、石は1位で飯田はトップ争いにも参加出来なかった。

多くの歓声の中で石は1位だというのに、まるで表情を変えず冷静そのものだった。

それは1位といってもこれはまだ第一種目であるため喜ぶのはまだ早いと言っている様に飯田は感じ、その石の姿に悔しい思いを落ち着かせたのだった。

飯田は決意を固めて顔を上げた。

その目には強い光があり、迷いは消えていた。

「皆、残り一分弱……。この後俺は使えなくなる。頼んだぞ。」

「飯田？」

轟の声にも飯田は応えない。

轟ならば説明せずとも合わせられると信じているからだ。

「しっかりと掴まっている。」

「奪れよ、轟くん！」

踏み込み

「トルクオーバー！」

ただひたすらに

「レジプロバースト!!」

駆け抜けた。

D
R
R
R
!!

飯田のエンジン音がフィールドに響いた。